

○阿部部会長 それでは、総理もいらっしゃいましたので、これより第4回「幸福のフロンティア部会」を開会いたします。

本日は残念なことに、インフルエンザですとか卒業式などいろいろ重なっております、6名の委員の方が欠席となっております。上村部会長代理、石戸委員、玄田委員、永田委員、小室委員、小宮委員が御欠席となっております。

また、本日は公務御多忙中にもかかわらず、野田総理に御出席いただいておりますので、まず冒頭にごあいさつをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○野田内閣総理大臣 今日は少数精鋭の会議ということでございますが、よろしくお願いいたします。

我が野田内閣の最重要そして最大のテーマというのは、何よりも復興、原発事故との闘い、円高やデフレを克服して日本経済を再生させること。これが大きな3つの命題でございますが、中長期的に考えたときに、これらの当面の課題をやり遂げなければならないのですが、何より大事なはこの日本が現状に甘んじようと思ったら、間違いなくジリ貧に陥ってしまうということ。勇気を持ってフロンティアを開発して、未来を切り開いていく意欲と能力があるかが問われているんだろうと思います。そういう道筋を戦略的に是非描いていきたいということで、皆様にお知恵を是非借りたいということで、この議論をさせていただいているわけであります。

かつては3丁目の夕日、映画で描かれている時代においては、今日より明日はよくなるだろうということを多くの国民が確信を持っていました。その確信というのは生活実感を伴ったからだと思います。残念ながら最近の若い人たちの間に、今日より明日はよくなるだろうという確信も実感もないと思うんです。そういう中で今回お願いをしている幸福というテーマが、多分私は一番難しいテーマだと思っておりますが、少子高齢化がますます急ピッチで進み、これは人類が経験したことがないスピードです。そして、かつてのように高度経済成長を常に果たしていくということは困難でありますので、そういう中でいかに国民が幸せを感じることができる国や社会をどうつくっていくのか。

先ほど申し上げたとおり、ほかにフロンティアの会議、叡智、平和、繁栄がございしますが、その幸福のところでどういう座標軸を持つのかということが、一番肝になってくると思います。

是非この一番大事なテーマを扱う会議として、阿部部会長始め、皆様の叡智を結集していただきますように、改めてお願いを申し上げて、冒頭のごあいさつに代えたいと思います。よろしくお願いいたします。

(報道関係者退室)

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、議事に入りたいと思います。まず本日の進め方ですが、前回の部会が3月1日にごございましたけれども、その後も上村部会長代理と私の方で、委員の皆様のヒアリングを進めさせていただいております。あと2名を残してほとんどの委員のヒアリングを終

わらせていただいたところです。それらの議論を集約したものを私の方から簡単に御説明させていただきますと思います。

次に、前回に続きまして残りのお二人の委員の方々から意見発表をいただきたいと思います。お時間の関係上、最大でもお一人 15 分をお願いいたします。今回は國光委員と野口委員のお二人をお願いいたします。

お二人の委員の発表後に、その質疑応答を行います。一旦休憩をしまして、その後に幸福部会の中間報告についての議論をしたいと思います。そこには具体的な政策案を出しておりますので、これについて皆様の活発な議論を期待しておりますので、よろしく願いいたします。

では、まず最初に私の方からこれまでの議論のまとめということで、配付しております資料の最後に、席上配付の 1 枚ものがございます。これが今までヒアリングの中または部会の中での議論で出てきたところの項目だけを並べさせていただいたものでございます。

簡単に御説明いたしますと、まず多くの皆様が現在の延長線上の 2050 年の姿ということでは幸福な姿はないと断言していらっしゃいました。どういう姿が挙がるのかといいますと、貧困・格差の拡大によって社会が二分化する。社会不安と他者を蹴落とすマインドというのが蔓延する。食料価格が高騰するということは、人口が世界的に増加しておりますので十分考えられますことで、これによって食料ですとか水や空気といったような現在、私たちが当たり前のように感じているものさえも十分に行き渡ることができない。特に格差の下の方の人たちにとってはそうなるだろう。

裕福で能力のある若者は海外流出する。財政悪化によって社会保障制度はますます縮小していると、かなり暗い絵が描かれております。

では 2050 年にどういう姿があるべきかということで、まず 1 番として挙げられているのが社会的弱者のエンパワーメント、格差縮小、貧困撲滅が達成されていることが条件である。社会保障財政に国民的理解があり、それに対する負担をしているということ。地理的に分散し、これは 8~10 くらいの小都市国家的なものが分散した形であるのが望ましいのではないだろうかという議論も出ております。各地域において地産地食が実現していること。想像力・表現力・国際性を育む教育が実施されており、また、教育 paths としてさまざまな paths が用意されており、教育格差が解消していることが条件としてあるだろう。

待遇の抜本改善を前提として全国民の柔軟な就労が実現し、長時間労働が廃止されている。これは私は若干過激的な言葉として全国民非正規化と言ったんですが、書き直されてしまいましたけれども、意図としては正規と非正規という 2 つの形の労働者があるのではなくて、すべての人が労働に見合う形での保障をされた上で、自分それぞれの好みの働き方をしているということ。それは在宅労働でもあるし、1 週間のうち 3 日間という方もあるかもしれないし、短時間労働というのものもあるかもしれないし、オン・オフみたいに 1 年仕事をして 1 年ボランティア活動というのものもあるかもしれないということです。

また、新たな公共の場が非常に大きく取りざたされています。1 つの例として挙げった

のが屋台村ということで、孤食ということでそれぞれの単身世帯が増えていく中で、1人で食べるのではなく、共同食堂みたいなところでたくさんの方の顔を見ながら食べるような場所が用意されるべきではないのか。それが意味での疑似家族のようなものとして拡大しているということ。血縁にこだわった家族が縮小していく中で、疑似家族を強化していく必要があるということです。

2025年までに切り拓くべき領域としては、先ほど言いましたような共有スペースや共有サービスの発展を促す必要がある。社会保障の見える化システムは、負担と給付の在り方が国民一人ひとりにわかりやすいものを公開するという。それから、高齢者や仕事とその他の両立を支援する技術革新。これは今までのワーク・ライフ・バランスと言われているようなものに、更に追加したような技術的なものも含めたものを促進する必要があるのではないか。両立支援のためのテクノロジーです。それが後々これから高齢化していくアジア諸国にも輸出産業になるのではないかとということです。

場所にとらわれない働き方。これも上と重なりますけれども、それを可能とする制度の設備と技術革新。フレキシブルな就労とそれを支える社会保障制度。これは上の制度のところにも関わります。分権化。8つか10ぐらいの分散した国土ということを申し上げましたけれども、それを達成するための住民参画を保障すること。若者の声が届く選挙制度、自営業者を増やすための規制緩和、教員の養成課程からの見直しと教育プログラムの開発、地域的な社会実験を行う必要があるということをおっしゃっています。

ボトルネックのところは幾つかだけピックアップして御紹介いたしますと、まず1つは例えば長時間労働といったことで、これが多方面に弊害をもたらしている。その最たるものとして霞が関という例が挙げられました。また、本気でない少子化対策、本気でない貧困格差対策。これらについての対策をとろうとするたびに国民の理解が得られないために、ひっくり返るといようなことが起こっているという根本的な問題がありますので、国民の理解が足りないのではないかとというのがボトルネックとして挙がっています。

基本原則としては貧困の削減、基本的 Well-being の保障というのが第一にあるのかと思います。私としては、ここでは少なくとも子どもの貧困に対しては数値目標を取り入れたいと思っています。また、社会的な持続可能性の向上、生活スタイルのイノベーション、世代間交流・参画の拡大、将来・若年世代への配慮ということが基本原則となるかと思っています。

具体的な政策のところは、今日の会議の後半のところでもより詳しく話していきますけれども、例えば選挙制度の改革が必要ではないかとということで、1つ挙げたのが平均寿命マイナス年齢だけのウェイトをつけた選挙制度を導入し、若いほどウェイトが多い選挙制度というものもあるのではないかなどもあります。それから、行財政、社会保障、労働、教育とさまざまな今アイデアが出ているところがございます。その詳しいことについては後ほどまた議論させていただきたいと思っています。

この論点は4月2日に開催される予定である第3回フロンティア分科会に報告させて

いただき、中間報告のとりまとめ方針がかたまります。また、4月中には幸福部会の中間報告を執筆しなければいけませんので、非常にタイトな日程となりますが、皆様御協力のほどよろしく願いいたします。

ここで公務の御都合でございますので、総理は御退席されます。ありがとうございました。

(野田内閣総理大臣退室)

○阿部部会長 それでは、これからまた議事の方に戻りたいと思います。

先ほど御紹介させていただいた論点整理というのは、後半の部分でより詳しく話していきたいと思いますので、ここでは一旦切らせていただいて、まずは國光委員と野口委員の御発表をお願いしたいと思います。それでは、國光委員、よろしく願いいたします。

○國光委員 國光でございます。よろしく願いいたします。

先ほど野田総理がいらっしゃっていて、野田総理の前でプレゼンすることになったらどうしようかと、内心ドキドキしていたんですが、御退席ということで若干ほっとしているところでございます。

私が今日お話ししたいことというのは、「幸福の青い鳥はどこにいるのか」という、この標題のとおりでありまして、幸福の青い鳥というのは御案内のとおりメーテルリンクの童話に出てくる、青い鳥をどこまでも小さい兄妹で追いかけて、いないなと思っていたら、実は自分の家の鳥が幸福の青い鳥だったという話です。

今の社会もこれに似ているところがあるのではないかと考えていまして、幸福になりたいということで皆さん青い鳥をいろいろ探していらっしゃる状況だと思います。厳しい社会情勢の中で、誰かが何とかしてくれる、ヒーローにすがりたいという気持ちもあるのではないかと思います。ただ、それは翻って見ると、結局は自分が変わるしかないということになると考えています。そういう意味も踏まえ、総論として「全員参加型社会」と、もう一つ、各論として私のももとの専門である医療の面から「未来にわたる健康保障」という2つをお話させていただきたいと思います。

こちらは私の原点である医療現場であります。右上にあるのが10年近く前の自分なのですけれども、医学部を卒業してしばらく医者をしておりました。このように在宅で高齢者の方が療養されていらっしゃって、この方は幸い家族に看取られて、家でお亡くなりになって、私も看取ったわけなんです。こういうおそらく幸せにお亡くなりになったであろうという患者さんがいる一方で、虐待を受けている子どもさんとか、お金が払えなくて子どもが喘息発作を起こしても病院に連れて来られないとか、母子家庭で妊婦健診を受けなくて、結局切迫早産をし、子どもさんは重度の障害を持って生まれ、そのまま施設で一生を過ごされて亡くなるなどの状況があります。さらに、リストカットを繰り返して救急搬送される方とか、寝たきりで家族の見舞いもなく病院でいわゆる社会的入院の状態でお亡くなる高齢者の方もいらっしゃるわけなんです。このように医療の現場からも社会の縮図というのはいろいろ感じるのですが、医療職として患者さんの幸せ・尊厳をいかに支え

るかということ、いつも考えておりました。

一方で、自己責任といえる部分も大きい生活習慣病の増加とか不要不急の受診の増加ということがあります。肺がんは嫌だけれどもたばこは吸いたい、高血圧は嫌だけれども酒は飲みたいという中高年の方、体に悪いのはわかっているけれどもジャンクフードをめいっぱい食べたい若い方などよくいらっしゃいます。また、有意な症状は特になさそうなんだけれども、半ば習慣的に病院に来られている高齢者の方とか、ここにいらっしゃる皆さんも、たまに病院に行ったりして朝すごく並んでいる状況に何だこれとは思われたりするかと思うんですが、軽症の方が随分受診されていたり、救急車をタクシー代わりに使われる方も中にはいらっしゃるのです。

さらに、医療システムとして、どこの病院に行ってもいいかわからない、待ち時間が長過ぎるとい患者側から見た問題もありますし、マクロの医療体制で捉えた時、地方の病院勤務医が辞めていくであるとか、国際的に病床数が多い、医療費が急増するというまさに構造的な問題があります。

このように、医療システムが全体としてうまく回っておらず、医療資源がそれほど緊急度や必要性の高くない部分にかなり割かれており、結果的に本当に困っている患者さんの幸せだとか尊厳を支えきれないということ強く感じており、ただそれは医療現場の努力だけでは限界で、背景の社会環境要因や制度を整えないと、その患者さんは救えないというのが一番の問題意識でした。

私は医療制度に関心があり、必要な医療サービスを本当に困っている人に届くようにしたいと思って厚労省に入省したのですが、政策に携わる身になって感じたもう1つの原点として、必要な給付の充実は当然ですが、金の話で恐縮ですがそこに財源の裏付けなくては絵に描いた餅に終わりがちで、給付と負担のバランスを一体的に考える必要を強く思いました。総理は今日はあえて、今話題の「社会保障と税の一体改革」についてはお話にならなかったのかと愚考しますが、私はこの給付と負担という観点が幸福、或いは幸福を支える社会保障の持続性という意味で大きなイシューと思っています。この図は上側が給付で、下側が負担で、横が年齢の軸ですけれども、給付は高齢者中心で負担は現役世代中心です。患者さんや医療関係者、議員の方などによく御指摘をいただきますが、誰しも当然ながら給付は欲しいのです。ただ、負担はしたくない。非常にジレンマな構造があります。そこで私が思うことは2つありまして、本当に困っている患者さんにサービスが届くようにするためにも、財源は湯水のように湧いてくるわけではない中、高齢者を含めて負担能力のある方にはちゃんと負担していただく。かつ、急増する医療などの社会保障費、現在108兆で毎年約1兆ずつ自然増しているわけですけれども、モラルハザードはなるべく防止し、給付をメリハリのついた形で効率化することに医療関係者も患者さんも皆がきちんと向き合う必要があると思います。

前置きが長くなりましたが、幸福ということについてですが、去年12月に内閣府経済社会総合研究所から出た「幸福度に関する研究会」では、社会経済状況、心身の健康、関係

性という3つが柱になっております。これらの指標の効用を高めれば理論上は幸福度は向上するのかなと思いますが、私個人的には完全な正相関にはならず、逡減、時には低下する可能性があるのではないかなと思っています。なぜならば、1つに更なる欲求が発生するということがあります。有名な心理学説でマズローの欲求段階説というものがありますが、生理、安全、愛情・所属など、段階を経るごとに新たな欲求が出てくるという構造があるということがあります。それから、もう1つは、日本特有の東洋的価値観、人並み感だとか謙虚さというのがあって「私はものすごく幸せです」とはなかなか言いにくい文化があり、それは国際的な比較の難しさなどにもつながるかなと思います。

よって、私が申し上げたいのは、幸福度をやみくもに追及することは限界があるのではないかなということです。では国家が考えるべき幸福とは一体何なんでしょうか。私は、どんな社会を幸福な姿として「是」とするかという、ある意味ジャスティスのようなことなのではないかなと思います。

そこで、私が是と考える幸福な社会というのは、極めて原理原則はシンプルだと思っていまして、1つに頑張れる人はどんどんやるということ。2つ目に、困っている人には手を差し伸べるといって、本当に幼稚園、保育園で習うような非常にシンプルなことに尽きるかなと思っています。1つ目は活力につながり、2つ目はWell-being、医療や介護や保育、教育などへのアクセス、就労支援などにつながるかなと思います。1と2をいかにバランスして、活力とwell-beingが両立する全員参加型の社会にするかなということが、今も50年後の社会も本質ではないかなと思います。

実現手段としては、私は自助、共助、公助という考え方が好きなんですけれども、自分で自立してやるということを中心にして、足りない部分を共助が補完して、共助というのは家族や友人や地域社会、NPO、ソーシャルネットワークなどの何らかのコミュニティが支える。最後に、社会の会費としての税財源で行政サービスにより支えるというように重層的な支え合うことだかなと思います。

ボトルネックは何かということですが、私も野田総理がおっしゃったジリ貧ということは本当にそのとおりだと思っていまして、少子化、低成長、社会保障の不安定、政府債務の累増などの問題はますます負のスパイラルになっています。そこで、私の問題意識は、20世紀から同じような議論をひたすら繰り返してきていて、金太郎飴みたいな報告書はたくさんあるわけなんです。何でそれなのに前進感がないのか。書いてあることは結構御立派で、そのとおりだと思うんですけども、実際に社会は変わっているのかと言われると非常にクエスチョンなのが一般の感覚だかなと思います。

それは何が問題なんでしょうか。ゴール設定でしょうか、それとも手段でしょうか。多分両方あるんだろうかなと思いますが、私は特に手段がまずいかなと思います。何でかということ、問題が先送りされているということ。合意形成ができないとか、または歪んでいるという構造があるかなと思います。これは安易にだれだれが悪い、政治が悪いとか役所が悪いとか、なんとか団体が悪いとか、いろいろ文句を言う方はいらっしゃるんですけど、それ

はそうだとでも結局その社会を作ってきているのは国民一人ひとりです。要するに、だれかを責めても始まらなくて、結局、一人ひとりが社会的に参加して納得感をもって自己決定や合意形成をしていかないと、例えば関心層は参加して得して満足で既得権化してという正のスパイラルになる一方、無関心層というのは不参加によって損をしているような負のスパイラルがあり、それをメディアもポピュリズム的に随分騒ぎ立てているという構図があると思います。

特に私は受益と負担の意識の薄さというのを感じます。ある程度負担能力のある方でも、給付はほしいが負担はいやだ、困っている人の存在は分かるが自分の負担が100円でも増えるのはいやで他の誰かがやることだという感覚が根強いように思います。そういう意識が根本になり、例えば震災でも、これだけ被災地が困っていてもたとえ宮城や岩手の瓦れきでも受け入れは嫌だというような、他者依存だとか共同体の中での無責任感が生まれやすく、結果的に、安易な負担回避や耳障りのよい話に飛びつく「青い鳥症候群」となっているのではないかと思います。

そういうことから、社会保障でいいますと、自助、共助、公助のバランスの合意形成の困難が生じているのではないかと思います。国際比較の一例としてばくっと大きくまとめてみると、自助は米国、共助は地縁血縁という面でブータン、共同体ベースの社会保険という面で独・仏、公助は税財源による行政サービスが中心という面で北欧というように位置づけられますが、日本は一体どういうバランス、理念を目指すのでしょうか。そろそろ地に足がついた形で決める必要があると思います。私自身は共助中心しかないだろうと思います。というのは、自助はこれだけ低成長では自ずと限界ですし、公助はもう少し厚くなってしかるべきですが、それ以上に、北欧がよく引き合いに出されますがあれほど増すというのは、個人的には、いわゆる御上や徴税への不信感などは歴史的にも根強く、日本では限界があると思っています。よって、消去法的には共助を強化するオプションが現実的に残ると思います。それはブータンのような地縁血縁かもしれませんが、社会保険のシステムかもしれないし、別の形のコミュニティで代替するかもしれない。いろんなオプションがありえますが、「共助の強化」がキーで、そのコミュニティに自分が進んで参加し、強化したり選択したりしていくしかないと思います。

では、どうやってやるのかということで、何で参加しないんでしょうとなると、私は結局つまらないから参加しないんだと思います。「おもしろきこともなき世をおもしろく」というのは高杉晋作の辞世の句ですけれども、つまらないというレベルで今は社会がセッティングされていて、それがじり貧感を増している。では一体どうしましょうというと、おもしろいと思ってもらって参加して、それで自己実現してコミュニティの社会の発展があつて、さらにおもしろいという好循環をつくらなければいけないと思います。

このように Step1、Step2 とあつて、できることからということで、まずは「日本全国いいね！（like）化」をしてきたらいいと思います。頑張る人を応援して困っている人への共感をもっと強くなればいいということ。広報戦略でブーム化も大事で、だれだれが言っ

ているということに結構日本人は弱いので、例えば池上彰さんとだれだれのコラボ。それはAKBでもジャニーズでもだれでもいいんですけども、各層のファンを集められるような方に社会的なことを何かを発信してもらおうということは大事なのではないかと思います。社会的イシューへの親近感、リテラシーをアップしてもらい、目標は1日1回トリアの泉ではないですけども、へえと言ってもらえるような何かを持ってもらいたい。一見ごくつまらないことですが、そういうことがコミュニティ、さらに地域、政策、政治への参加につながってボトムアップしていくムーブメントになるのではないかと思います。

これは私の「いいね！」の例で、私の知り合いが関わっているのですが、例えば寄附文化を育てるNPOだとか、投票率を上げるような活動、リーダー塾をつくっている方や、世の中に笑顔を増やすビジネススクールというふうないろんな活動をされている方がいます。こういう方をもっと「いいね！」と応援できるような文化をつくって、地域や政策や政治にもっと関わられるような土台をつくっていければと思います。

もう一つ「未来にわたる健康保障」ということですが、私は健康を支えるために必要な医療が未来永劫だれでも、どこでも、いつでも受けられるようになってほしいと切に思っております。内閣府調査によると、幸福度を判断する際に「健康」はもっとも重視される項目で、男女とも年齢が上がるにつれ増加する傾向にあります。

未来にわたって健康を支えるためには、いつでもだれでも必要な医療を受けることができる体制が求められ、それを自助、共助、公助の重層的なセーフティネットによりみんなで創っていくことが大事です。特に共助の部分で、例えば病院に受診される高齢者の方の中には、寂しくて話を聞いてほしいとか、だれかとつながりたいと思って来られる方が割といらっしゃいます。そのお気持ちには寄り添う必要がありますが、ただ現実的に仕組みで捉えると、それは必ずしも相手が公共財的な性質を持つ病院、医者である必要はないと思いますし、税財源とか保険料による公的サービスでなくてもいいのだらうと思います。そういう細やかなニーズに行政、特に国が対応するのは本当に限界で、地方政府、さらに地域、NPO、ボランティアなどがいわゆる「新しい公共」として入っていただく余地は大きく、自立的にサービス提供を行っていただいたり、行政との契約に基づくサービス提供をもっと増やす仕組みが作れればと思います。随分進んできたものの、まだまだ広げていくには課題は多いようですが、このあたりはご専門の方のお知恵もぜひお借りできたらと思います。

医療提供体制の充実に向け、公助の部分では広く薄い配置になっている医療機関の機能分化と集約化、医師の偏在を緩和をもっと行い、救急医療や在宅医療、介護などの必要部分を強化することが必要です。そのための財源の確保も必要であり、年齢を問わず負担能力のある方にはご負担をいただくことは避けて通れません。一例で、テクニカルな話で恐縮ですが、法律上は70～74歳の医療保険の自己負担は2割なんですけど、毎年約2000億円予算措置して1割にしていますが、低所得者対策はきちんと行う前提で、筋としては法定事項でありますし2割負担いただく必要があるのではないかと思います。この2,000億

があれば一体どれだけ本当に困っている患者さんがどれだけ助かるかと思えますし、医療以外でも、本当に緊急の課題、例えば待機児童解消などの財源にあてる余地も出てくるかもしれません。制度ではこういう改善の積み重ねが全体の機能強化や幸福につながるのではないのでしょうか。

最後に、実際の参考モデルの積み重ねとか共有で横に波及することが大事だと思っているのですが、これは地域包括ケアということで人口規模に応じた急性期、慢性期、在宅・介護・住まいなどの各段階での地域に根差したサービスのイメージです。また、これは愛知県岡崎市で、大きな救急病院である岡崎市民病院に軽い患者さん含めて殺到して本当の重病者のケアが困っていたという状況が、住民や医師会などと一緒に受診や医療体制を見直し、機能分担ができて、救急医療がひっ迫した状況を食い止めることができたという例です。

最後はちょっとかけ足になってしまいましたが、以上で私の説明は終わらせていただきたいと思えます。

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、続いて野口委員、お願いします。

○野口委員 野口と申します。

この部会をきっかけに、幸福というのは何かなというのは自分自身も考えてみましたが、いろいろ考えているうちに幸福という幸福を実現させようという政党があるというので、幸福実現党のマニフェストも読んだんですが、いま一つぴんとこなくて、意外と多かったのが天才バカボン。バカボンなんですけれども、幸福とは今日もお日様が昇ることという本があって、意外とこれはすごいシンプルで、幸福とはだれかに必要とされることとか、幸福とは新しい自分と出会うこととか、シンプルな言葉でよかったかなと思っています。

私自身が幸福とは何かなと思ったときに、このデータは文科省のデータなんですけれども、このデータの前に、18年にまた別の文科省のデータがあって、中学生と高校生に自分の体力に自信がありますかというアンケートがあって、中2だと自信があると答えたのは15%なんです。高2になると17.7%しか自信があると答えている。自信があるのが15と17なんです。

これが健康について心配したことがありますかということ聞いたときに、中2の男子は自分の健康について心配だと答えたのは5割以上なんです。高校2年生になると6割以上の人は自分の健康に不安を訴えている。要はおっさん化しているんです。中学生、高校生が自分の体力とか健康に自信がないというのが圧倒的に増えているというのが、まずこれは18年のデータです。

その次に今ここに出ているのは、これは23年のデータなんですけれども、ロープウェイやリフトを使わずに山に登ったことがないというのが67%、キャンプをしたことがないというのが57%、海や川で貝を取ったり魚を釣ったことがないというのが42%、いろいろあ

りますけれども、海や川で泳いだことがないというのが 30%。

次のグラフは平成 10 年と 21 年を比較しているわけです。このグリーンの方が 10 年で、赤い方が 21 年ですけれども、平成 10 年だとキャンプをしたことがないというのが 38%だったのが、21 年には 57%まで増える。例えば海や川で貝を取ったり魚を釣ったことがないというのは 22%から 42%、倍になっているわけです。また、トンボやチョウを捕まえたことがないというのが 19%から 41%になっている。海や川で泳いだことがないが 10%から 30%になっている。

このアンケートがどれだけ正しいかわかりませんが、アンケートをとった、このアンケートの中で出てくるのが、高収入で、高学歴で、本をよく読んで、結婚して子どもをつくって、言葉使いが丁寧で、お年寄りに席を譲るといふ大人たちが、要は自分がここに当てはまるという大人たちにアンケートをとったときに、自分たちが子どものころに海や川で貝を取ったり魚を釣ったことがあるとか、チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたことがあるとか、友達とけんかをしたり、いじめを止めさせたりしたことがあるということを上の方が高学歴で高収入で、まともな人間と思っている人たちが自分たちの子ども時代はこうだったと言っている人たちが意外と多いようです。

野外活動の衰退なんですけれども、子どもの人口がそもそも減っていますので一概に言えないんですが、例えばボーイスカウトだと昭和 57 年のときに 33 万人いたのが、平成 22 年で 15 万人に減っているわけです。いろんな理由があるんですけども、例えばボーイスカウトなり野外活動が減っていく理由の中で、非常に多いのが塾です。1 位が塾で 2 位がピアノ、3 位が習字で 4 位が英会話なんです。ちょうど 1983 年ぐらいからボーイスカウトがぐっと減っているんですが、ちょうど 1983 年にファミコンが世の中に登場するわけです。ですから習い事または表に行くよりも、家の中で何となくファミコンをしている方がおもしろいぞといったことが 1 つのきっかけになって、例えばボーイスカウトなり YMCA なり、何か地域で子どもみんなでやろうという野外活動化が減っていつている。

私の環境学校に来る子どもたちはたくさんいますけれども、経済格差が学力格差を生むと言われていますが、経済格差から学力格差を生む真ん中に、経済格差によって体験格差を生む。要するに私の環境学校に来る子どもたちもそうだし、ボーイスカウトもそうなんですけれども、経済的に裕福な家の子どもたちの親がそういうことに関心がある。ボーイスカウトなりキャンプなり、私の環境学校もそうですけれども、経済的に裕福な親ほどそういうところに子どもを入れたがる。

そういういろんな体験をした子どもたちというのは、私なんかもボーイスカウトに入っていましたけれども、小学校のときに入っていて、ボーイスカウトというのは単純にアウトドア云々ではなくて、アウトドアをしながら共同生活だったり、各地域、その地域で自分たちが何ができるかということです。私が小学校のときには老人ホームとか、ボランティアをかなりやるわけです。最初は嫌だなと思ったことがありますけれども、老人ホームに行くと 1 日ボランティアして、帰るときに何か自分はいいことしたなとか、よくいろん

な経験からいろんなことに関心を持つ。いろんなことに関心を持っているうちに自分で調べてみたりとか、要は世の中のことに関心を持つということです。その経験の中から世の中のことにいろんな関心を持った結果、自分で調べてみたりとか勉強してみたいとかなって行く。ですから、経済格差によって体験格差ができてしまうことが、学力格差を生むのかなと感じています。

このデータの前に、これも文科省のデータだと思うんですけども、都市化が進んで例えば都会の中で田んぼなり畑なり雑木林なり小川が減ってきて、その昭和30年に比べると子どもたちが表で遊ぶ場所が40分の1から50分の1に減っていると言われていています。

私の環境学校は主にいろんなところでやってきましたけれども、やはり圧倒的に裕福層の子どもが来るんです。その中で経済格差によって体験格差を生んではいけないのではないかとという中で、義務教育の中でそういったいろんな活動ができないかというところで、長野県の小諸市というところから環境大使をやってほしいという話が来たときに、名前だけの環境大使では余り意味がないものですから、どうせやるならば小学校が6校ありますので、その6校と義務教育の中で地域で間伐体験なり、いろんなことをやれる授業をしたいということの小諸市に提案させていただきました。と申しますのが、個人の学校ではずっとやっていましたけれども、義務教育に持っていけないかなというところでいろんな教育委員会にも相談してきましたが、当時は外部の人間が入ってきてというのは意外と教育委員会の方もそこにはなかなかすんなりいくものではなくて、義務教育の中に入り込んでいくのが実現しなかったんです。その中で小諸市が環境大使をやってほしいと言うものですから、だとするならば、そういった小学校6校全校でやらせてもらいたいというのを1つの条件に引き受けて始めました。

この小諸市環境学校は教育委員会が直接絡んでいない形で、まず下の協力機関というものがあって、国が入っています。県が入って長野県の小諸市が入って、森林組合が入って、勿論学校です。地元のNPO2つと私がやっているNPOとで国、県、市、団体、学校、NPOということでみんながそれぞれスタッフを出して、一緒にプログラムをやっているんですけども、そういう形でやったのが、教育委員会が絡んでいないところでやったのが、これが全国で一番最初の取組みでした。

いろいろ学校の先生からも私のところに相談があるんですけども、環境教育を教えることを学校で学んでこなかった。だからどうやって環境教育を教えていいかわからないという学校の先生方も多いんですが、学校の先生がすべてやることには無理があると思っていて、ですから地元のNPOなり市なり県なりいろんな人が入って、その義務教育の中でそういった現場ではいろんな活動をしながらか、要は最大の目的は活動をすることによって関心を持って、そして自分が社会のために何ができるか。

例えば私は今いろんな活動をしていますけれども、最初からいろんなことをやろうと思っていたわけではなくて、登山家としていろんな現場に行きます。いろんな現場に行くと、そこで自分でいろんなものを結果的に見る。富士山なら富士山のごみの問題もそうだし、

ヒマラヤのごみの問題もそうです。自分でそれを見てしまうと、見るということはどこかで知るといことです。知るということはどこかで背負ってしまうんです。ですからそういったいろんな野外体験なりいろんな現場の経験の中から、自分には何ができるのかということによって広がってきた。

ですから私の環境学校でもよく子どもたちに言うんですけれども、環境のメッセンジャーになってくれと。例えばいろんな地域に行って、その地域で何ができるのか。例えば小笠原諸島だったら当時飛行場をつくるつくらないというのが、物すごく東京都と小笠原の間で割れていまして、そこに最初、子どもを連れていくときに環境という頭で行っていませんから、全員が全員飛行場反対と言うんですが、1週間ぐらいみんなそこでいろんな現場に行ったり、実は島の人は飛行場がないと困るんだといういろんな話を聞いているうちに、1週間もするとだんだんみんな意見が分かれてきて、最終的には飛行場賛成反対が半々に分かれたりとか、ただ、みんな環境は守りたい。だったら山を削らずに海の上に浮かぶ飛行場をつくれればいいのではないとか、みんな自分たちの意見を出し合って、それがリアルに現場に行っているいろいろ見て感じたからこそ、ではどうすればいいのかとみんな意見を出し合うんです。

これから幸福を考えるときに、自分たちの社会がどういう社会で、自分たちが何かをやることによってどう変わっていくとか、そういう社会のつながりの中で、それが1つの幸福を目指していく方法なのかなと思いつつながら、義務教育の中で本格的な体験学習を、地域とともに取り入れていくシステムをつくっていききたいなと思っています。

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、まず2人の委員の御発表内容について、簡単に質疑応答の時間を設けたいと思います。どなたからでも構いませんので挙手していただければと思います。

今日は委員の数が少ないんです。その分、発言のチャンスはあります。どうぞ。

○福嶋委員 野口委員にお伺いしたいんですけれども、いただいたプレゼンテーションにありました、子供の具体的な体験が欠如しているというご指摘は非常に大事な問題だと思っています。、いろんな人の気持ちをわかったり、世の中で起こっている事象を自分の問題としてとらえていく上で、きちんと体験を持ってもらうということが大事なんですけれども、この問題と今回取り扱おうとしている幸福というのは、具体的にどういう関係にあるとお考えでしょうか。

○野口委員 幸福はどのような社会をみんなで目指していくかということですね。例えば世の中のことに興味を持つということが1つ幸福につながっていくと思うんです。ですから子どもころにいろんな活動をしていて、興味を持って自分が何かをすることによって社会がよくなっていくとか、ボーイスカウトというのは本当にそれが強かったんです。単に火をおこすとか、キャンプをするということだけではなくて、地域の大人たちが必ず入ります。その自分たちが住んでいる地域で何ができるのかということをもみんなで意見を出し合って、ごみ拾いをやったり落書きを消したりとか、何でもいいんですけれども、そうい

うことを各地域でみんながやっけていくんです。ですから、そういう活動を通して自分がいいことをしたとか、自分がやることによってよくなったではないかということが、要は社会に対する関心を持つと思うんです。

今の日本という言い方はすごくよくないと思うんですけれども、私が現場で感じる印象は、やはり社会に対する関心というものが子どももそうだし大学生も含めてですけれども、かつてなら社会に対する関心があつて、学生運動ということがあつたかもしれませんが、今はそんなことはありませんし、ですから社会の中での自分の位置とか、何かができるというようなことを体験の中でやっけていく。

例えば塾というのはこれはこれでいいと思うんですけれども、例えば塾に行くことによって成績がすぐ上がる。だから、親なんかは非常にわかりやすいので塾に入れることがあると思うんですが、逆に体験学習が例えばボーイスカウトに入つてすぐ成績がよくなるわけでもないし、ところが、教育って何かなと思つたときにすぐに結果が出る教育も教育かもしれないけれども、時間がかかるかもしれませんが、子どものときにいろんな経験をしたことが、結果、それが大人になって生きてくるというのが本当の意味での教育かなと。ですから、幸福を考へるときに教育というのはかなり大きいのではないかと思っています。

○阿部部会長 國光委員、どうぞ。

○國光委員 野口さんありがとうございました。今日いらっしゃらなくて恐縮ですが、石戸さんが御提案をされていたデジタル教科書と絡めてなんです、都会のお子様で緑にアクセスがどうしても限られる方というのが今後増えていくと思うんですが、それを代替する意味でデジタル教科書を推進することがありえるかと思ひます。一方で、長野まで新幹線ですら1時間ちょっとだろつということ、とにかく自然に直に触れた環境教育を重視するというやり方もあるかと思ひます。恐らくどちらも大事だったりするなと思ひますが、ITを通じた環境教育ということをどう評価されているかということをお伺ひしたいと思ひます。

○野口委員 東京は確かに緑が少ないと言われているけれども、決してそうでもないですよ。奥多摩なんかもそうです。東京は広いですから場所を探せば幾らでもあると思ひし、例えば今、東京都がやっけていますが、東京都緑の基金というものがあつて、埋立地にごみでつくつた島があるんですけれども、そこで森をつくろうということで、いろんな学校を絡めてそこで実際に、要は明治神宮の森がありますね。あれも大正時代に人がつくつた森ですが、100年経てば自然の森をつくるといふ、かなり細かく計算してつくられた森のようなものを今、ごみの島でつくろうといふことで、そういうところもある意味自然をつくつていくということかもしれません。

インターネットはありだと思ひます。といふのは例えば私たちが富士山の清掃でやっけてきたときに、これは子どもたちが主にやつたんですけれども、樹海なりをパトロールするわけ。どこに不法投棄があるかといふのは環境省も地元の市町村もはっきり言つてよくわかつていないんです。それでは、みんなで調べようといふことで、森に入りながら携

帯で、docomo とタイアップしたんですけれども、ゴミを見つけると写真を撮る。それをネットで送ると樹海の地図に載るんです。彼らがずっとそれをやることによって、どこにどういふゴミがあるかということがみんながネットを通して見られるし、逆に環境省の人なんかそれを参考にしたこともあったんです。ですから意外とネットを通して伝えていくということはありません。

ただ、ネットばかりになりますと、例えば私の環境学校に来る小学生なんていうのはネットですごく調べるんです。勉強というかデータは物すごく入っているんです。わーっとみんな来るので、みんなにとって環境問題って何？と聞くと、環境問題は京都議定書の6%を守ることでと言う子がいるんです。結構普通にいます。ですからネットを通していろいろデータを調べるということも大事ですけれども、そこはバランスでしょうね。ですから一番いいのは、実際に自分が現場に行っているような活動をして、自分が感じたことをネットを通してどう伝えていくかということだと思えます。ですから、先に自分の体験があって、自分の感覚とか感性ですね。自分で現場に行っている感じたり感性を自分の中でふくらませて、それをネットを通して伝えていくという順番の方がいいのかなど。

この間、大阪で小学校に講習で行きましたら学校の先生が言っていました。カブトムシをデパートで買ったらしいんです。そのうち足がぼろっと取れて、その子どもが先生のところへカブトムシを持ってきて「デパートに行ったら足はくつつくの？」と聞いてきたらしいんです。ですから、先生も笑えなかったと言いますが、本当に買って来たカブトムシの足が取れたらデパートに行ったらくつつくと思っている子が、これは一部ではなくて本当に増えて来たということでしょうね。

○阿部部会長 1点、私からも質問よろしいですか。

野口委員に対してなんですけれども、体験学習は素晴らしいことだと思って、私自身も7歳の息子2人おりますので、是非野口さんの環境学校に入りたいと思ったところなんです。一方でこの子どもがデータでチョウやバッタやトンボをとったことがない子が、これだけ多いのは衝撃的ですけれども、多分恐らくそうなんだろうなと思えますが、私たちの子どもを考えると、私は東京育ちなので、東京はもっと汚くてもっと自然がなかったんです。本当に昭和40年代とか50年代はひどい状況だったと思えますけれども、それに比べれば今、うちの子どもたちも23区内に住んでいますが、公園などに行けばバッタぐらいいはいますし、トンボなどもいます。なので、機会がないわけではないんです。

私たちのころと今の子どもたちを見ると、多分一番違うのは、私が子どもたちには子どもたちが勝手に自分たちで外で遊んでいる時間があつた。それで公園とかで遊んでいたのがバッタとかも捕まえた。今の子どもたちは自然に触れ合うときに大人がオーガナイズした、セットアップしてあげた場でないとやらないんです。その違いというのはどこから出てくると思えますか。何で大人がセットアップしなければいけないのか。

○野口委員 大人がセットアップというよりも、今の小学生が忙しくなっていると思

うんです。先ほどお話したような塾なり習い事なりが増えてきて、あとは公園に今は子どもが大分少ないですね。そうすると誘拐なんかいろいろあったりとかして、安全の問題で余り公園に行かせたくない親が意外と多いんですって。

あと、私なんかは小学校のときに木に登っていましたが、うちの近所の小学校の子どもが公園の木登りをして落っこちたんです。落っこちて残念ながら亡くなったんです。亡くなったときにその学校は公園の木登りを禁止してしまったんです。ですから、それが正しいかどうかということだと思えますけれども、私なんかは小学校のときに木に登っていて、上まで行って調子に乗って上ったときに、ふと気づくと震えて、落っこちたら死んでしまうのではないかと思いながら、ぷるぷる震えながら下りてきましたが、あれってあの瞬間に子どもながら死のピンチを感じますので、子どもながら極度に緊張したら死のピンチを感じながら下りてくるというあの経験が、ひょっとすると生命力を高めていくのかなと。

確におっしゃるとおりで、大人が用意しないとなかなか行かなくなりました。私の環境学校でも、中学生ですけれども、小笠原でやったときにシーカヤックで海に行くときに、ひっくり返ると元に戻らないので、ひっくり返ったら脱出しなければいけないんです。そういうことを何度も説明して水がないところで練習して、実際に水の中に入って浅いところで練習するんですけれども、私がぱんとやったらひっくり返ってねと。ぱんとやるとみんなひっくり返るのは上手なんです。10人でひっくり返ったら半分ぐらいは脱出してくるんですが、残りの半分はシーカヤックがひっくり返ったまましーんとしているんです。出てこないんです。どうしたのかなと思って水中メガネをつけて中を見ると、パドルを持ったまま、シーカヤックがひっくり返ったまま海の中でじっとしているんです。慌てて1人ずつ引っ張り出すんですけれども、最後の人は水を飲んでいましたが、もがくとか脱出しようとかないんです。完全にフリーズしていました。そういうことはすごくよく起きる。ですからインストラクターを増やさないと事故が起きるなと思ひまして、途中増やしましたけれども、ただ、何でそういうことが起きるのかなということを十何年やっていると、野外経験が皆無の子が本当に多いんです。

野外経験が若干でもある子は何か生命のピンチが来たときに、そこでとっさに動いたりとか、岩をつかんだりとかするんですけれども、頭がフリーズしてしまって何もできなくなる子というのは、意外と野外経験が皆無な子が多い。皆無になってくるといざ生命のピンチがあったときに何もできない。ですから、それは野外経験というのは1つの動物としての生命力をつける訓練なのかなとも思いますけれども、やはりこれは親の問題が多いと思っていて、例えば長野県もそうですが、かつてはジャージ軍団がいっぱいまして、学校でみんなで山に登るとかかなりやっていたけれども、最近は大分減った。それはけがをしたらどうするとか、雨が降って風邪をひいたらどうするとか、親が相当学校にいろいろ言う、学校も親に言われるのは面倒くさいですから、だったらやめておこうかみたいな。ですから、ひょっとすると親側の問題だと思うんです。子どもは本来、外で遊びた

いものですから。

○阿部部会長 新田委員、どうぞ。

○新田委員 大変すばらしい発表を聞かせていただきました。ありがとうございます。

幸福部会に入っていると、今まで幸福って何だろうかと真面目に考えたことがなくて、会社をやっていると顧客満足という言葉は出るんですけども、顧客の幸福というのは一番最上位に来るのかなというので、考えさせられております。

國光さんと野口さんにいろいろお伺いしたいんですけども、國光さんは若いときは深夜までががん仕事をして、それが幸せで、今はお子さんといえるのもかなり幸せだと。やはりワーク・ライフ・バランスが大事だなと。年代とともに幸福感が変わってきますけれども、先月、ANAの飛行機に乗っていたら発想の来た道ということで、千葉県の亀田総合病院という病院が取り上げられていたんです。患者さんという言葉はよく聞くんですけども、患者様という言葉で医療に対して物すごく真剣に向き合っていて、私も死ぬんだったらこういう病院がいいなというふうに思われるような医療だったなと。

酒田にも最先端の予防歯科で有名な日吉歯科診療所があります。虫歯がない子どもをつくって、一生自分の歯で食べられることが健康に繋がるという考えかたです。このような病院のシステムというか、本当にお客様の立場に立っていろんなことを改善されているような病院はいいなと思うんですが、そういうことに対してどう向き合っていけるのかというか、そういうものも仕組みだと思いますので、それが質問でございます。

野口さんは自己実現が非常に強い方だと思うので、まずやりたいことをやるんだと、何でもやっていますね。山登りとかは命がけでやっているわけですけども、そういう気持ちはどこから湧いてくるのかと、生と自己実現というか、死と自己実現は極めて微妙なところにあるんだと思うんですが、その辺の価値観を質問したいと思います。

○國光委員 御質問ありがとうございます。

一生懸命顧客満足度を高めるために努力されている病院はありますが、そうでもないところも実際多くこれまた難しいのですが、医療はある意味古典的な社会でもありますので、もっと患者さんのために、また職員のために、個々の病院のミクロの体質改善の余地は大きいと思います。

ちなみに、マクロの仕組みで考えていくとまた色んな背景があるのですが、患者満足度を分析していくと、相関が強い要因に「待ち時間」というものがあります。すごく忙しいのに病院に行ったらかなり待たされて、3分診療で帰されたみたいなことはみなさん経験されたことおありだと思いますが、それは一体なぜでどう解決していけばよいのでしょうか。原因は複合的で、もちろん病院独自の工夫で改善余地も大きいのですが、一方で、患者さんを含めた関係者が共に考えていく必要もあります。というのは、患者さんは大きい病院を好む傾向があって、ちょっとした腹痛や風邪などでも大病院に集まりがちで、そこで長蛇の列ができてしまいます。すると、患者さんの不満は高まりますし、そこで働いているお医者さんはすごく多くの患者さんを次から次へと診なければいけない。中にはや

はり疲れてしまう方もいらっしゃるんです。私自身も、新田さんがご指摘いただいたように新人医師をやっている頃は、どんどん学びたいということがあったから当時は持ったんですけれども、やはり限界があります。医療現場で何が起きているかという、忙しい大病院や小児科や産科などの勤務医の方が辞めてしまって街中で診療所を開業する、またはそれほど忙しくない診療科などに移る傾向があります。2000年頃から地方の病院の医師が引き上げて地域医療が崩壊するという報道が出るようになりましたが、その地域の医療が守られるように、患者さんにも一緒に考えて、変えていける部分は確かにあります。というように、1つの社会的イシューを深めていくと複合的な要因があり、各関係者がそれぞれ一緒に取り組む余地は大きく、野口さんがおっしゃったような、問題に対しての肌感覚での距離感の縮小にもつながればと思っています。すみません、ご質問の趣旨から少々脱線しましたが以上です。

○野口委員 戸塚ヨットスクールの戸塚さんとたまにお会いするんですけれども、あの方の言っていることはすごくわかって、本当だったらここにいらしてもいいのではないかなと思うんですが、山で私が感じてきたことと、戸塚ヨットスクールでやっていることはかなり近いんです。

それは日ごろ私たちは当たり前生きていますけれども、当たり前でなくなるんです。それは生命もそうだし、水を飲みたいと思ったって山に水はないですから、溶かさなければいけない。ああいう危険なところへ行けば行くほど、全身で危機感を感じなければいけないです。ですからちょっとした音とか、雪崩なり落石というのは音が絶対にありますので、ちょっとしたことで耳が反応したりとか、五感をフルに生かしていかないと、いずれどこかでやられてしまいます。

ヒマラヤに行くときまず思うのは、日本に帰りたいんです。行った瞬間に帰りたくて、帰ってくると日常生活が最初の1か月は物すごいハッピーでして、日ごろは何とも思わない日常生活が、ヒマラヤから帰ってくるとすべてがバラ色なんです。蛇口をひねれば水が出るとか、お湯が出るとか、暖房があるとか、ベッドがあるとか、本当に何でもない日常生活がすべてないので、そうすると帰ってきますと最初の1か月半くらいは、本当に日常生活って幸せだなということをしみじみ感じるんです。ところが、2か月、3か月いると日常生活が日常過ぎて、日常生活に感謝とか何もしなくなるんです。何も感じなくなってきたところにまた何も無い世界に行きたくなるんです。

ですから、本当にこの幸福を考えたときに、そもそも幸福ということを経験者が集まって議論していること自体が幸福だと思うんですけれども、本当に不幸ならそういう議論はしていないと思うんです。ですから、私たちは今の日本社会でも十分幸福だし、ただ、そこを幸福と感ぜられなくなっているのではないかと思います。ですから、本当にこの自然の中に行くと、発展途上国とかいろんな国を回ると、基本的に日本は幸せな国です。これがどれだけキープできるかは別として。

戸塚先生がおっしゃっていたのが、あえて不安定なヨットに乗っける。それで落とすわ

けです。落ちると生命のピンチを感じる。そうすると最初はぼっと押すとすぐに子どもは抵抗することなく落ちるんです。落とされて恐怖のあまり必死にしがみつこうとするわけです。それを何回かやっていると、次に押してもなかなか落ちなくなると言います。そこで生命の危機を、あそこは人工的に経験させていますけれども、そうすることによって生命力をぐっと鍛えていくということです。

戸塚ヨットスクールは人工的にやっていますけれども、私たちはヒマラヤに行くとそれがヒマラヤの体験の中で今、生きているということに、本当に向こうに行きますと遭難者がいっぱい転がっていますので、必ず遭難者は出ますし、その中で私たちは行くわけですから、生きているということを非常に意識します。逆に人間は死を感じなければ生きてるとか生きたいということ、ひょっとすると感じづらい生き物かもしれませんが、野外活動というのはヒマラヤほどオーバーでなくても、例えば日本で山を登っていれば雨が降って雷がごろごろ鳴って、落ちてきたらやばいとか、そういうような経験はすごく大事なのではないかと私は思うんですが、そこが非常に残念ながら減ってしまっています。そこをどう増やすきっかけをつくっていくのかなとか、私はそんなふうに思っています。

○阿部部会長 福島委員、どうぞ。  
○福島委員 質問ではなくコメントになってしまうんですが、野口さんのおっしゃったことは私は非常に共感できるんです。

私は見えなくて聞こえないという障害を持っていますが、これは例えば山登り。山登りは私などは富士山の8合目までしか登れなかったし、ネパールに行ったことはありますが、専らホテルで缶詰めで会議をやっていて山には行けなかったんですけども、山が極限状況であるという点では私や私以外にもさまざまな障害を持っているとか、重い病気を抱えた人というのはある種、自己の内部に極限状況を抱え込むんです。極限状況を抱える、あるいは自分の中での戦場を生きるという体験をせざるを得ない。そうすると生きるということがよりリアルに感じてくるという面が、そういう逆説的な面があります。

私の場合は聞こえなくて見えないということで、情報が遮断されてコミュニケーションができなくなるという状況に置かれたことによって、逆に何が一番自分を救うかというのが浮かび上がってきて、それが直接的なコミュニケーションだということを前もお話したんですが、例えば有名な盲ろう者でヘレン・ケラーさんという方がいますけれども、ヘレン・ケラーさんの場合は赤ちゃんのときに見えなくて聞こえなくなっているわけです。生後19か月のときで、それから、サリバン先生という人と出会って、言葉を覚えていくわけですけども、そのときにきっかけとなったのが水を触るということが1つのきっかけになっていくんですが、私は彼女の生まれたアラバマ州の生家に訪ねて行って、その言葉に彼女が目覚めていくきっかけとなった井戸が今も残っているので、手押しポンプで出す井戸なんですけども、それにも触ってきて改めて思ったんですけども、サリバン先生というのは先生と言うけれども、二十歳の娘さんです。特別、教員養成系の教育も受けていないし、自分自身、弱視で視覚障害もある。だけれども、彼女はすごいことをやってのけるわけで

す。

つまり見えなくて聞こえないヘレンを、今でいうところのハーバード大学に入学させるところまで成長させる。その方法というのは机の上の勉強ではなくて、とにかく体験です。実体験をベースにしていく。本を読むにしても自分の体験、ヘレンが触ったりにおいのかいんだり、体を動かしたりして、触れて感じとっていったものすべてをベースにして言葉を教えていく。そして、そういう体験がベースにある言葉というのは生き生きとしていきますので、どんどん広がっていく。これは多分皆さんも例えば小説などを読んでいて、池波正太郎とか読んでいるとそばを食いたくなったり酒を飲みたくなったり、豆腐でも食おうかとなるわけです。あるいは生ビールが出てくるような場面が別の作品とかで出てきたら飲みたくなる。だけれども、もし全然一度も食べたり飲んだことがないような、名前も知らないような料理ばかりが出てきたら、多分私たちは何も反応しないんです。

つまり、それは食べた経験があるから小説を読んでいるときに思わず連想して、うまそうだなと思ったりする。だけれども、食べたことがなかったら、言葉の上で理解しても余り実感がわからない。これは私なんかは食い意地が張っていますからそういう連想をしますが、食べ物でなくてもみんな同じだと思うんです。

自然環境の話をなさっても、自然環境の中で泥んこの中遊んだ経験とか、友達と殴り合いしたとか、崖から落ちそうになった経験とか、私は昭和 37 年生まれなのでそういうものを経験していますけれども、そういう経験がなかったら言葉が空疎に飛び交うだけなので、やはり IT だけでは限界があって、IT はすごく大事だけれども、デジタル的なものと同時に生の体験を提供することが難しいだろう。

大人がセットアップするのかどうかという議論ですが、それはある程度せざるを得ないと思います。今と昔は余りにも違い過ぎるので、私は子どものとき、私は兵庫県神戸市の端っこの方に住んでいたんですけれども、本当に昭和 30 年代の終わりから 40 年代の前半で、高度成長期の 1 つの典型的な時期で、生まれたとき私の家の前は土の道だったんですが、小学校 1 年のときに舗装されてアスファルトになっていく。すぐそばに池が 3 つぐらいあるような小さな山があって、ザリガニとりもできたし魚釣りもできた。それが小学校 2 年、3 年生ごろまでに崩されていって団地が建っていくみたいな、そういう変化を目の当たりにして育ってきた世代なんですけど、そういう昔はほったらかされていても、子どもたちは遊び場に困ることがなかったわけで、大人がセットアップするなんてことはほとんど考えられないわけです。

塾にもそんなに行かないし、でも今のように舗装だらけになって、生活全体が塾に行っただけで忙しかったり、でも自分のところだけ塾に行けないというのは、またそれはいじめられる対象になるとか、そういうふうになってくると、やはり体験を一定程度提供するような仕組みをつくっていかないとならないような社会に、私たちはしてしまったということがあるんだと思います。

実際にどうやるかというところについては名案はないですけども、とにかく申し上げ

たかったことは、抽象的な概念の連鎖からは、何も生まれない。根っこの部分で実体験がないと、言葉も概念も伝え合うことにも意味がないということをお願いということで、その辺が多分、野口さんのメッセージと根っこの部分でつながるかなと思っています。

以上です。

○阿部部会長 古市委員、どうぞ。

○古市委員 お二人の発表ともすごい面白かったです。

國光さんに特に伺いたいんですけども、一人ひとり社会参加していくという問題は私も非常に重要だと思いました。確かに立派な報告書がたくさん出されているけれども、全然できていないというのは私も感じていた問題感です。

この社会参加とか当事者参加を持つようになるときに、それこそ野口さんがおっしゃっていたようないろんな現場に行って、自分で見て知って背負うということはすごく大事だと思うんです。一方で社会保障とか医療費の問題は、なかなか自分が当事者にならないと気付かない問題も大分多いと思うんです。特に若年層に限って言うと医療費だとか社会保障というものはどうしてもすごい、自分とは関係ない問題だと思いがちになってしまう。そこで何か自分とは直接関係のないような問題を、当事者意識を持つためにいいアイデアというか、もしもそういうものがあったら教えていただきたいというのが1つ。

あとは一人ひとりが参加する社会というのは、逆に言えば市民が育つことが前提である一方で、行政とか霞が関と言い換えてもいいですけども、既存の行政が持っていた権益を手放すことでもあると思うんです。その行政が持っていたものを手放すというプロセスは、果たしてうまくいくのかどうかということに関しても伺いたいと思います。

○國光委員 ありがとうございます。

前の質問の方の当事者意識なんですけれども、それはすごく難しいです。特に若い方は医療とかほとんどかかったことがないと思うし、実際に自分の家族が病気になったとか、自分がけがしてしまったとか、車にひかれたとか、そういうことがない限り全然医療って何？という世界だと思います。

私が1つ思うのは、自分でなくてもいいんですけども、何かだれかが例えば震災のときに医療が受けられなくて、困って亡くなってしまった方とかもいるわけです。そういうものを例えばメディアだとか、まさにソーシャルネットワークとか、震災のときにいろいろ出てきて、一部の方のリピーターもかなり多いんだと思うんですが、そういうもので自分の生の体験ではないんですけども、人がこんなことで困っているんだということに関するシンパシーというか、そういう感度を高めていけばいいのではないかと思います。

多分、でもそれは自分の実体験で、野口さんがおっしゃったような自然と触れ合う中で生き物の生死を見るとか、ボートでひっくり返って見たという体験がないと、多分なかなか生まれないものなのではないかというのが1つ。

あとは制度のことで言ったら、今の社会保障と税の一体改革は、この場でこの話をするのはあれかもしれないんですけども、消費税が5%から10%になるかもしれませんよね。

嫌ですよ。 「何でだよ」と思うではないですか。 「何でだよ」と思うところがすごく大事だと思っていて、では何で消費税を上げなければいけないんだ。 経済成長すればいいのではないとか、無駄だってもっといっぱいあるだろうとか、簡単にみんな思うわけで、それはそのとおりなんですけれども、それ以上に例えば財源が足りなくて困っている人が本当に困っているとか、そんなに要らない人にたくさんサービスがいつているのではないとか、いろいろ1つの関心から芽づる式に論点が見えて、そうなんだ、へえというものが生まれるんだと思うんです。 そういう本当に身近な、何でもいいんだけれども、きっかけをどんどん掘り下げていくような余裕ができればいいと思いますし、小室さんが頑張っておられるように残業時間が短縮して、そういう社会的な 이슈にも関心を持ってもらえる余裕ができればいいのではないかと考えています。

もう一つ、行政側の既得権だとかそういうことに関してなんですけれども、これは問題なんです。 一方でしょうがない部分があると思います。 国民のためにというのもあるんだけれども、所属する組織の組織防衛的なところはどうしても出てきてしまうんです。 ただ、それは人間の非常にある意味リアルな欲求であって、自分の研究を大事にしたいとか、自分の企業を大事にしたいとかと同じように、役所だったら役所の権利だとか範囲をなるべく保っていききたいと思うのは批判は当然ありますがある意味自然な在り様といえると思います。

ですが、そんなことを言っている場合ではないので、行政側の胆力で、手放すところは手放す。 ただ、全部一気に手放してしまうと、例えば地方に下したときに地方行政は、言っただけは悪いですけども、そんなに十分受け皿ができていない部分もあるだろうかと思いますし、NPOも運営能力はまだ十分とは言えないだろうと思っています。 そういうところを少しずつ降ろしながら、うまく降ろした先をエンパワーしていくというやり方を幸福部会の提言としてできていったらいいのではないかと考えています。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

これからこういう議論をますます深めていきたいと思っておりますけれども、まずは今日は3時間で長くなりますので、ここで一旦休憩に入りたいと思っております。 10分間の休憩をしたいと思いますので、あそこの時計で30分くらいに帰ってきていただいて、32分くらいからスタートしたいと思います。 よろしくお願ひします。

(休 憩)

○阿部部会長 それでは、後半に入りたいと思っております。

後半では実際に報告書の作成に向けて、幾つかやっていきたいと思っております。 まず最初に、今日欠席でいらっしゃっている上村先生から、報告書に向けての非常に斬新的な図と、その説明について資料の提出がありましたので、それについて福島委員の方か

ら読み上げていただければと思います。

○福嶋委員 今日、部会長代理がお休みですので、私の方から代わりに読むようにという御指示をいただきました。お手元の資料3-2と、席上配布取扱注意という部会長代理のお名前が入っているもの、こちらに沿って本当に読み上げるだけですけれども、御説明させていただきますと思います。

部会長代理の上村です。本日は勤務している関西学院大学にて卒業式があり、未来ある若者を社会に送り出すという仕事をしています。そのため、本日の幸福部会を欠席させていただくことをお詫びいたします。ただし、本日の部会の重要性は認識しております。各委員の報告が終わり、中間報告書をまとめる新しい段階に入るからです。

そこで私の方から、『「幸福」のフロンティア：切り拓くべき領域のイメージ』と題した1枚のペーパーを報告させてください。これまでの幸福部会での議論と、各委員へのヒアリングで得た情報、さらには3月8日に行われた第2回フロンティア分科会における阿部部会長の報告を集約し、私なりにまとめたイメージ図です。

この図は3次元の図になっております。横軸に『世帯の「幸福」』、奥行き軸に『地域の「幸福」』、縦軸に『未来の「幸福」』をとっております。これら3つの軸が交わるのが原点です。原点において「幸福」はゼロです。2012年現在の「幸福」は、原点に近い点にあります。その顔はあまり嬉しそうではありません。

このまま進んだ場合は3つの「幸福」ともに、左下のマイナス方向に動き、左下の「幸福」の顔は泣いています。このようにならないためにも、マインドセットを変え、様々な政策を講じ、右上のプラスの方向にもってゆかねばなりません。この図のプラスの方向が「切り拓くべき領域」であり、プラス方向に向かうことが、「社会の持続可能性の向上」につながると考えます。その際、「基本的 Well-being の保障」が土台にならなければなりません。

「幸福」を「 $\square$ 」（カギ括弧）で囲っているのは、どのような「幸福」を目指すべきか、この部会でも様々な議論があったことを反映しています。今のところは多義的な「幸福」を表現するため、「 $\square$ 」（カギ括弧）で囲っています。これから、3つの軸の「幸福」について簡単に解説いたします。

第1は横軸の『世帯の「幸福」』です。あえて「家族」ではなく、「世帯」という表現にいたしました。その理由は単身世帯の増加です。単身世帯を排除しないために、「家族」ではなく「世帯」としました。ここで『世帯の「幸福」』は、「生活スタイルのイノベーション」によって高まると考えています。

第2は奥行き軸の『地域の「幸福」』です。奥行き軸は人々の活動の空間的な広がりだと考えてもよいです。『地域の「幸福」』は、「世代間交流・参画の促進」によって高まると考えました。

第3は縦軸の『未来の「幸福」』です。縦軸は時間軸だと考えてもよいです。『未来の「幸福」』は「将来・若年世代への配慮」によって高まると考えています。

これら3つの「幸福」を高めるためにどうすればよいのか。具体的な政策というよりも、方向性をキーワードにして、3つの「幸福」の周辺に散りばめています。かなり細かくなりますので、ここでは説明を省略いたします。

今後、中間報告書をまとめる段階に入ります。ひとつの報告書をまとめるには、幸福部会の各委員がもつイメージを共有化していくことが大事だと思いました。そのため、部会長代理の試案として、今回のイメージ図を提案させていただきました。

本日、提案したイメージ図はあくまで「未定稿」ですから、確定しているわけではなく、単なる「たたき台」です。各委員のすべての思いや考えを反映できていないと思います。私は本日の議論の場にいることができませんが、よりよいアイデアやイメージがありましたら、積極的に提案してください。皆様の建設的なご意見をお待ちしております。

以上でございます。

○阿部部会長 ありがとうございます。

この図についてはとりあえず脇の方に置いて、いつでも見られる状況にしておいていただいて、報告書の形について議論させていただきたいと思います。

今日は委員の数が少ないのが本当に残念ですけれども、今日御欠席の委員からはまた個別にお話を伺ったりして議論を深めていきたいと思っています。

まず資料3-1をごらんください。これは中間報告の項目だけ書いたもので、非常にこれ自体は皆さん見たことあるものだと思いますけれども、このまま進んだ場合の2050年の姿をまず書こうと思っています。ただ、これは皆さんに最初のコメントのときに同じようなフォーマットで書いていただきましたが、もう少しリアル感のあるものを書いてもらおうと思っています。ですので、なるべく具体的にイメージがわきやすく、読みやすい読み物のような形のことを考えています。

それから、あるべき2050年の姿ということで書きたいと思います。切り拓くべき領域ということで方向性。この中で先ほどの上村先生の図が入ってくるのではないかと思います。領域、ボトルネック、基本原則、具体的な政策。その後に政策マトリクスを置きます。

今日、主にお話したいのは政策マトリクスのところですが、この大きな表がありますので、これは後ほど議論の材料とさせていただきたいと思います。委員名簿が来まして、別冊ですが、これが幸福部会のスペシャルバージョンとしての別冊で、2050年のある1日というものを、古市先生を中心に書いていただこうと思っています。これは実際にシナリオ型にして、この感性は若い感性に任せたいと思いますけれども、実際にあるAさん、Bさん、Cさんの日常が、2050年にはどうなっているべきかという形で書いていきたいと思っています。

それから、もし可能であれば、このシナリオを映像化して、動画にさせていただこうと思っています。そうしますとホームページでそこをクリックするだけで、画像が動くようなことができますので、今の時代はこういう文字をずらずらと読んでくれといっても、実際にはそれほど読まれるものではないので、10分ぐらいのビデオを見れば、報告書の目指

す方向性がわかって、こういうのいいなと思えるものをつくればいいなと思っています。

こちら辺は実際に作業をやってくださる先生方の御負担が多くなってしまいますので、どういう状況になるかわかりませんが、今の私と上村先生の希望としてはできたらなと思っています。

後ろに席上配布で取扱注意というところで、先ほどの報告書の中間報告の目次に2パラグラフほど付け加えたものを書きました。これはどのようなトーンで書くかということをし少し見ていただこうと思って、ここに書いています。これは上村先生が書いてくださったんですけども、今まで國光委員の発表からもありましたが、こういう類の報告書はいっぱいあって、すごくきれいな言葉がいっぱい並んでいるんです。でもなかなか読みづらいし、同じような言葉ばかり、同じようなキャッチフレーズばかりで金太郎飴みたいところがないよう、なるべく新書レベルぐらいのものの読み物になるようにということで、メッセージがきちんと伝わるものを考えてつくっていきたいと思います。

見ていただければわかりますように、かと言って全くの読み物ではいけなくて、下のところにそれぞれに関して例えば資料、図、グラフ、データを適宜付け加えていこうと思っています。ですので、この報告書の一番後ろにデータ編として、かなりのいろいろなデータが付いているものをイメージしています。このデータについてはそれぞれ皆様のプレゼンテーションですとか、御専門分野のものだと思いますので、後々に私たちの方から、このデータのグラフを出してくださいという御依頼が行きますので、申し訳ありませんけれども、皆様方におかれましてはそのデータを探したり、出していただくというごの願いをしたいと思います。

例えば今日も、野口委員の御発表の中でもなかなか面白いデータがいっぱいありましたし、國光委員の御発表の中でもいろいろあったかと思っています。そのようなものをどんどん出していきたく思いますので、実際に報告書を執筆するのは3月、4月で終わりなんです。ですのでこの2か月間の間にそういう御依頼が行き、申し訳ありませんけれども、かなり早いペースでそれに対応していただくことをお願いすることになるかと思っていますので、よろしく願いいたします。

報告書全体はこのようなものをイメージしているんですけども、これまでの中で何か御意見またはこのようなものを加えた方がいいのではないかとか、このような書き方にした方がいいのではないかとかという御意見はありますでしょうか。

○福島委員 まず上村さんがいらしたらおっしゃるであろうと思いますので、一言。私は神戸出身ですので「かんさい」学院大学ではなく「かんせい」学院大学です。

それから、この上村さんの図なんですけど、非常に斬新な興味深い3次元のX、Y、Z軸のイメージですね。マトリクス、行列ですね。空間的に行列で表現するというイメージなんだらうと思いますが、世帯をX軸に乗せて、Y軸を地域、Z軸を未来における「幸福」がプラスかマイナスかと持ってくる。非常に面白いと思うんですけど、私自身こういう3次元的な図式化というものを時々、これまでに書いた論文でもやっているんですけど、1つ問

題というか難点があって、もし4つ目のファクターが出てきたら図示できないということです。4次元が表現できない。

例えばこの例で言うと、世帯があって地域があったら、常識的には次に国家ないし世界とか地球というレベルがあるのではないかという疑問が出てきます。つまり時間的なものに行く前に、地理的な広がりでも世帯と地域だけで終わっていていいのかという疑問が出てくると思うので、3次元モデルは面白いと思うんですが、ファクターが3つ出てくるだけでいいのかどうか、要検討かなと思います。それが1つ。

もう一つは、未来の幸福の度合いを考えると、次の世代を担う子どもたちのことを考えるのはすごく大事だというのは、そのとおりだと思うんですが、例えば2050年という時代を考えたとき、例えば古市さんは今27歳でしたか。

○古市委員 そうです、27歳です。

○福島委員 27歳ということは、2050年というのは38年後だから古市さんは65歳なわけで、ちょうど高齢者になっているわけですね。つまり、未来の世代を担う未来における子どもとか今の子どもということだけではなくて、未来における高齢者、すなわち今の20代、30代の人、もしかすると40代の人はまだ生き残っているかもしれませんけれども、とにかくそういう未来における高齢者への視点というのが少ないのではないかと。そもそも高齢者というフレーズ自体が、この政策マトリクスの中には出てきていないのではないかと。というのが気になったんです。

勿論、未来のことを考えるからどうせ次世代ということになるのは当然だろうと思いますが、今、生きている高齢者、更に将来における高齢者というのは相当の部分占める人口なわけで、2050年の高齢者、高齢者が多くて困りますみたいな感じで言われてしまいますけれども、すごく大事な人口のパーセンテージを占めるので、高齢者のことを考える視点が重要だろうと思います。世代間の交流とか世代間の問題という中に含まれているのかもしれませんが、そういう高齢者というフレーズが足りなかったのがやや気になったということ。

もう一つ、3つ目として自殺の問題が触れられていないので、これは別に私たちが議論しなかったからかもしれないんですが、皆さん御存じのとおり日本は人口に対する自殺者の数が世界でワースト3位か4位です。いろんな状況やファクターがあると思いますが、自殺するというのは幸福ではないと感じている人の衝動的な行動ないし計画的な行動の1つの例である可能性があるんで、勿論ぴったり対応はしないと思いますが、少なくとも自殺者がたくさんいる国で、幸福な国ですとは言えないだろうと思うので、そこはなぜ自殺するのかという問題も含めてですが、幸福部会としては自殺の問題は避けて通れないのではないかと考えていますので、政策の中に入っていなかったから例として入れるべきなんだろうなということなんです。

最後、1つお伺いで、だれに対するお伺いということでもないんですが、私自身勉強したいなと思っていることは、将来、人口が減っていくとか高齢者のパーセンテージが増える

とされていますが、ある程度のところまで人口が減って、もし減少が止まるラインがあるとするならば、そこでいずれ人口の構成比がフラットになるはずですね。それがいずれのころか。

つまり、これから何年ぐらい私たちが苦しい状況なのかという見通しを立てるのが重要かなと思っています。永久に人口がどんどん減っていくわけではないでしょうし、更に永久に高齢者が多くなるわけではない。あるところでパーセンテージは落ち着くはずなので、その時点をどの辺に設定するのか。2050年よりは後なんだろうと思いますが、2100年とかそこまで後ろなのかどうかはわからないので、その辺りがもしわかれば、今後調べていきたいなということ、気が付いたことです。

○阿部部会長 ありがとうございます。

議論を3歩ぐらい先に進めてくださったと思いますけれども、今、私たちがやりたいのはまさにそういうところで、皆様の前に実際にこのマトリクスがあります。福島委員は事前にきちんと全部見てくださったようで、ありがとうございます。恐らく多くの皆さんは事前に資料を送付しておりますけれども、見ていらっしやらないと思いますので、これを見ていただいて、これはどうやってつくられたかと言いますと、私たちのヒアリングの中で皆さまから出てきたもの、または、私や上村先生が考えてこれは要るのではないかという政策の具体案を書いています。赤字のところどころがどちらかと言うと目標みたいなものであって、青字のところもそうです。将来こうなっていればいいみたいなところになっています。それ以外の黒字のところは、実際にこれこれまでにこれをやるというものです。

私がこの政策の表にこだわって、これに時間を費やしたいというのは、例えばワーク・ライフ・バランスの達成という美しい言葉は、今までのたくさんの報告書の中にもいっぱい出てきているわけですが、では、それをするために何が必要なのかというところで実際それほど大したことが行われてこなかったというのが、今まで全然政策が進んでこなかったことの1つの理由かと思っています。

ですので、なら私たちはこれは絶対にやるべきだと思うことをここに書いていきたいと思うんです。勿論この中でも優劣はあると思います。これはかなりいろんな分野にまたがっていて、大きな改革などもあるものですが、その中でも絶対にこれだけはなければどうにも前に進まないというものと、そうでないものもありますけれども、色分けはとりあえず後にするとして、こういう政策があればいいなど。

例えば先ほど福島委員は自殺対策がないとおっしゃいました。私としてはもう一歩進んでいただきたい。自殺対策をするために何が必要か。今の自殺対策で何が足りないのかというところまで突っ込んで書ければいいかなと思っていますので、皆さんも御自分の専門分野のところだけでも構わないですし、そのほかのところでもいいですし、または今、書かれているものの中でもかなり過激なものもあって、例えば選挙は義務化するですとか、いろいろな議論が飛んでいるデジタル教科書の話もあるかと思っています。ですので、全部私の方から御説明することはいたしませんので、見ていただいて、ちょっとこれはですとか、

この部分が足りないだとか、そういうことをどんどん発言していただければと思います。

実際に今こちらにコンピュータを用意しておりますので、この表はオンタイムでリアルにどんどん変えていくことができる状況です。これ自体も今のところは取扱注意で机上配付のみですので、この場でこの作業をやっていきたいと思います。

○國光委員 政策の方向性は事前に読ませていただいたんですけども、これはだれがやるのかという、つまり行政がやることというイメージですか。

○阿部部会長 そうですね。ただ、先ほどおっしゃったように、共同というところで NPO 等がやるべきところというのがるのであればいいです。ただ、それを NPO などがこういうものをやればいよいよねと言っているだけなら、何もならないです。では、その NPO がそういうことをやるようになるように奨励するためには何をしなければいけないか、どのような条件を整えなければいけないのかということをお話しなければいけないわけです。そういう意味ですべて政府がやることです。

○福島委員 もともと図は私の場合、自力では読めないで、大学のスタッフに点字に訳してもらった過程で少し説明を入れてもらったんですが、よくわからないのは3つの軸に分けて書かれているということは、つまり8つの象限があるわけです。その8つの象限のどこにどの政策が絡むかみたいなことは書いてありますか。

○阿部部会長 それは今のところ先ほどの政策のマトリクス、政策の方向性という表と図は一体化させてはいません。対応するようにはつくっていません。図は上村先生がつくってくださったものなので、この政策のたたき台というのはまたそれとは別につくりましたので、これは政策分野ごとに分かれて書いております。

○福島委員 はい。

○永久事務局長 質問なんですけれども、選挙の義務化という話ですが、これというのは若い世代の投票率が低いので過少に代表しているという観点から、選挙に出てこいという意味合いですか。

○阿部部会長 そうですね。これからますます若者が少なくなってくるので、もし今の投票率が、各年代ごと保たれれば、ますますどうしても高齢者向けの政策が優先されるようになってしまうであろう。そのためには選挙の義務化で少なくとも全員が投票するように仕向けることができるのではないかと。あるどこかの国では選挙しないと運転免許がもらえないという制度があるそうですので、そのようなところで日本でそれがどういうふうになるかわかりませんが、つくっていくのも可能でありますし、直ちにできることとしては例えばインターネット投票というものができるようになる。これは技術的にも可能だと思いますし、すぐにでもできるのではないかと。その次は選挙の義務化みたいな形にするですとか、その後にもっと過激な話になると寿命ウェイトをつけるという話です。ちょっとそこまではという意見は勿論あるかと思いますが。そういう意見をお聞きしたいんです。この部会の意見としてこれを言っているかどうかということになります。

ちなみに寿命ウェイトとか言いますと、まさにそれを言っている若い 20 代、30 代の皆様は、実際にこれを導入したときには寿命ウェイトが全くない状況になります。

○永久事務局長 寿命ウェイトのほかに、例えば今いろいろ議論されている中では、子どもを持っている方に関しては 2 倍の投票をあげるとか、そういうものもあるんですけども、政治学的にはかなり微妙な議論で、まだそれほど先に議論が進んでいないテーマでもあるんです。義務化をしてしまうと、逆に今後の人口のマップを見ないとわかりませんが、また年齢の高い方が過大というか、若い方を過少代表とするような感じになるかもしれないので、ちょっと微妙な話かもしれないです。

あとは投票しない自由があるというのも、これはある意味認められなければいけないものでもあるかなと個人的には思いますが、そうした突っ込んだ議論がこれだけのテーマでも必要になってくる感じがします。

○阿部部会長 そうです。すべてのものがかなり、どれをとっても今すぐにというものばかりだと思うんです。だからあえてこのような場でお話して、ただ、この中で恐らく多くのものは落とされていくんだと思うんです。残るものは何なのかというところだと思います。

○野口委員 多分これは法律の話も出てくるではないですか。法律の専門家はこの中にいるんですか。

○阿部部会長 いません。でも、法律は変えようと思えば変えられます。

○野口委員 でも、ある程度法律をわかっているなければいけないですね。だから法律の専門家が 1 人いた方がいいのではないかと思います。

○阿部部会長 それは後でアドバイスを受けることは可能かと思います。

○野口委員 あと、ここにいろいろわーっと書いてあるものは、フロンティアの委員会ではいろんな委員の先生方がお話をされたところから入れているのか、それ以外のところも入っているんですか。

○阿部部会長 ほとんどはフロンティアといいますか、この幸福部会のヒアリングの話に出てきたもののプラス、私と上村先生のもので、ですので幸福部会の委員の方々の意見として出てきたものだけです。

○野口委員 わかりました。

○福島委員 私も今、法律のことは申し上げようかと思ったんですが、例えば選挙の問題だと恐らく憲法を改正しないといけなくなってくるだろうと思いますが、でも最初この部会が始まる時に、やんちゃな議論をすればいいという話があった。このやんちゃという意味が現在の法制度などを前提としない。つまり思考実験、考えることの実験を含めてできるとすればという、SF 的な自由な発想で考えるというところにこの部会の意味があると思うんです。

現行制度であるとか現在の経済、社会、文化の状況を考えてとてもできそうにないか、だめだと言っていると、それは何も進まないというか、これまでの幾らもあった部会や検

討会と同じだと思うので、この幸福部会にもし斬新さがあるとすれば、ほかのところだととても恥ずかしくて言えないようなとか、青臭いといいますか、理想過ぎていたり非現実的であるように思えるようなことであってもいいということ、そこに意味があるだろう。私たちが出したことがそのまま実現することはほとんどないかもしれないけれども、言うことによって、それを見ることによって、何がしかの影響を受ける人が今後出てくるかもしれない。そうすればそれで意味があるのではないかと思うんです。

○阿部部会長 おっしゃるとおりだと思います。ここに出されたものがそのまま政府の政策としてなるということは恐らくなくて、その段階にたくさんの方のいろいろな委員会や、この上のフロンティア分科会などがあるわけですので、そこはいきなりこんなものが政策になってしまってどうしようと心配するのではなくて、ただ、2050年にこうあるためには、こういうものがあつた方がいいねというものを、とりあえず今はアイデアとして出していくという形でやっていきたいと思うんです。そうでないと、「これをやるには憲法改正をしなければいけない、これをやるにはこの法律を変えなければいけない、だからできないよ」、だったら結局法律内、憲法内の現状維持の現行のままの制度になってしまうわけです。なので、余りそれほどとらわれず、自由に発想していただければと思います。

ただ、そこでSFの世界を描いてもしようがないので、やはり2050年はこうあるべきだという、2050年というところから離れないでいただきたいんです。2050年にはこうなっていてほしいというところ。なので、新田先生の御専門のところであります食料自給率の話であれば、2050年には食料自給率50%を達成してしてほしい。では、そのためには何をすればいいのかという話です。なので2050年は三十何年後ですから、そこにある姿から発想して、何をすればいいのかということを考えていただきたいと思います。

○新田委員 私も福島先生と同じ考え方でございまして、現状のままだと悲観せざるを得ないという前提条件があつて、2050年の話になってしまうんだと思うんですが、食料の問題から言っても世界中で生産できる穀物は23億tと言われていて、人間は1年間180kgあれば生きれると言われてるんですけども、その勘定だと100億でも大丈夫なんですけど、今、日本人は約300kg穀物を消費しているんです。それだと80億しか人間は賄えない。

だからどういう生活をしていくかで全く変わっていくという前提がありまして、いろんな部分で、地球に人間が生存できていくのかどうかということも含めて、本当にこういうことを目指して人間がきちんと幸福感を持って生存できていくために、2050年どうあるべきかとか、2025年どうあるべきかという方が。自殺の問題に関して自分環境が悪くて自殺する人も私の周りにもいますし、病気を苦にしてそういう道を選ぶ人もいるでしょうし、いろんなそういうテーマがそれぞれにあるんだと思うんです。

ですから、あるべきという部分で言うと、現在の延長線上のこのままというのは私としても、このままという言葉のこのままが具体的によくわからないんです。明日よくなるかもしれないし、あさつてよくなるかもしれないし、このままというのは悲観的にとしかとらえようがない言葉かなと実は思っていて、なので我々が本当に幸福感を持って持続可能性と

うか、将来とも人間が生きていける環境をどうつくるかというふうにとらえたいなと思うんです。

○阿部部会長 おっしゃるとおりだと思います。そういう観点から例えば医療の部分はそれほど今、書かれていないですけども、もし國光委員も何かあれば言っていただくと、追加で入れていきたいと思っています。

○國光委員 医療に関してもいろいろ思うことはあるんですが、上から見ていったときに格差の解消はすごく大事で大賛成なんですけれども、医療費の無料化は必要なんですか。これは全部の方に対して無料化するということですか。

これは深い議論になってくると思うんですが、私は負担できる方には負担していただくというのが筋ではないかと思っています。子ども手当も、麻生政権の定額給付金でも、あれだけばらまきと言われ大変な財源がかかって、その一方、例えば物すごく困っている難病や障害者、低所得の方などにお金が足りなくて手当ができなかったり、小児産科救急などの医療が破綻しかけたりなど、そういう現実があるわけで、負担と給付のバランスがとれるような政策にすべきなのではないかと思っています。

○阿部部会長 私は普遍的制度で負担と普及のバランスはとれると思っています。それは負担の方のバランスがとれていないからなんです。所得税の累進性ですとか、そういう税の方からで負担はバランスがとれるようにすればいいと思っているんです。

なぜ普遍的な制度の方が優れているのか。これは私の持論ですけども、というのは、そうでない制度というのは結局のところ、その給付を受けられる人と受けられない人というのを線引きしなければいけないんです。そして、その給付として受けられるものは、自分のお金で払って得るものより下等なものでなければいけないという意識が働きます。例えばアメリカなんかもそうですね。無料の医療がありますけれども、その医療の質はそれほどよくない。だけれども貧困者のための医療制度、それと自分で買う医療がある。そちらの方は質はいいみたいな、質の二分化が出てきてしまうので、どうしても国民を二分してしまうんです。

それなのであれば、教育ですとか医療ですとか人間の根幹に関わる、尊厳に関わるベーシックなものは、私は普遍的にだれでも同じサービスを受けられるようにするべきで、それに係る医療の負担というのは、税制と社会保険料の累進性の方をきちんと高めてとっていくべきだと思うので、給付だけのバランスを見ると普遍的制度というのは非効率のように見えるかもしれませんが、負担の方まで全部考えれば必ずしもそれはそうではないと思います。結局それは北欧のように大きな政府になるということなんです、なので矛盾するわけではないのではないかと思います。

○野口委員 だとすると、多分ここに数字が必要だと思うんです。おっしゃったことでどれぐらいお金がかかってというような数字が入ってこない、本当にそれで維持できるのかどうかというのがわからないですね。

○阿部部会長 数字というのは、そのためにどれぐらい財源が必要かということですか。

○野口委員　そうです。

○阿部部会長　恐らくそれはできなくて、また、それをやるにはこの部会は1か月で終わるのはとても無理だというのがありますし、お金が結局これだけしかないから、これしかできないという議論を今までしてきたんです。そうではなくて、絶対に必要なものは何なのか。そのために幾ら必要なのか。では、その財源を調達するには何をすればいいかという逆の発想をしないと、どうしてもそれは今の財源の中では何もできない。

○野口委員　でも結局、民主党のマニフェストというのはそういうものだと思うんです。言ったはいいいけれども、できないだろう。だから提案するからにはある程度根拠が必要だと思うんです。根拠が全くない提案だったら、どこまで意味があるのか。ある程度の根拠というのは、勿論、根拠がすべてではないと思うんですが、ある程度ないと本当にそれのできるの？みたいな。

○阿部部会長　ただ、それは今すぐにといいもの、直ちのところのお金のかからないようなものだけを入れて、2025年という感じでは財源を要するものを入れるというやり方もあるかなと思います。

○新田委員　実は幸福度に関するとか、幸福のフロンティアの部会で、國光さんは幸福度指標案をベースにして書かれている。これは物すごい現実的なことだと実は思っているんです。これはベースとなる部分があって、それプラスという考え方だと思うんですけれども、やはりセーフティーネットとか安心して生きられるという条件がないと、子供はなかなか生まれないだろうと考えておまして、こういうベースになるものを利用してとか、それで将来ということの方がむしろわかりやすいのかなという感じもするんです。非常に幸福ということがわかりやすくまとめているのかなと。

それから、個人的には現状の税と社会保障の問題でいくと、やはり年金というと自分に返ってくるから年金なのかなといつも思うわけですが、古市さんみたいな若い人たちは60、70歳ぐらいになって現役世代2人から自分たちが支えてもらうみたいな、非現実的な議論をせざるを得ない。我々からすると年金は、もしかしたらセーフティーネットの部分の税金なのかなと。きちんと生活できない人たちをどう支えていくか。ですから、生活できる人は逆に言えば今は年金という言葉ではなくて、税金にしてすべて支えていくような仕組みにしないと、やはり先が見えないんだと思うんです。成り立たないとか、そういう現実的なところにもっと落としていって、将来の国の姿とか、地球の姿でも社会の姿でも、そういうわかりやすいシステムの方がより目指すべきような幸福が作りやすいのかなという感じを持っています。

○阿部部会長　目指すべき幸福というのは、幸福度の指標を基にというのはどういった意味ですか。

○新田委員　國光さんの今日の発表もそうなんですけれども、やはり指標そのものがすごくよくできていると思うんです。幸福度になってしまうと、どうしてもベースとしては、この指標に目が行ってしまうんです。

○阿部部会長 幸福の定義として、それを使うということですか。

○新田委員 そういう感じなんだと思うんです。

○福嶋委員 私も補足意見なんですけれども、このペーパーを見ていて最初に思ったのは、資料の一番右側の「2050年のあるべき姿」という欄に書かれた様々な社会の状況が、人々の幸福につながるかどうかというところがまず最初に議論されないと、この表自体、なかなかコンセンサスが得られないと思うんです。

逆に、この表を左端の欄を見ると、政策の様々な分野が書いてあるんですけども、例えばこの分野の体系と、先ほど國光さんが御紹介して下さった内閣府の研究会の幸福度指標の体系が、どういう関係にあるのかもなかなか見えない。対応している部分は幾つかあるんですけども、ある程度その因果関係が見えてくると、こういう政策をやっていたら最終的に幸福感の向上につながるという道筋が見えやすくなると思うんです。まず最初に表の全体的な建てつけをまず1回議論した方がやりやすいと思います。ですが、今はこのマトリクスの中の一つ一つの要素が議論が進行してしまっていて、私はそこに非常に危機感を覚えているんですけども、その議論をする前に、まず全体の構成を議論した方がいいのではないかというのが私からの提案です。多分、新田さんもそういう印象をお持ちなのではないかと思います。

○阿部部会長 幸福の定義のところですね。

○福嶋委員 はい。それはまさに上村先生も幸福という言葉にカギ括弧をわざわざ付けておられるのは、そういうところを御配慮いただいているからなのではないかと思います。

○阿部部会長 幸福の定義は幸福度調査でやっているものですね。基本的ニーズ、住居、子育て、教育、雇用、社会制度、ライフスタイル、家族、これのとおり項目を立てることは可能だと思います。これは今、政策分野で分けているだけなので、それはつくり変えることはできます。

ただ、おっしゃっている2050年のあるべき姿のこのところは、ヒアリングの中で皆さんの言われてきた言葉なんです。恐らくこれは自分の言ったことだと思われるところもあるし、ほかの委員が言われたところは見たことないと思うと思うので、では、2050年あるべき姿の欄だけでも今日はお話をしたいと思うんです。

ただ、皆さんが言われたことを私としてはこちらに書いておりますので、そこで私はこう思わないというところがあるのであれば、それは合意に達しなかったということで落とすしかしようがないかなと思います。これ自体、オープンということは確かです。

○新田委員 会社の場合、よくベンチマークという言い方で話になるんですが、どういう組織、どういう経営を目指そうかということで、優れた会社をベンチマークして、そこと比較してということになりますね。国単位でとらえてもブータンの幸福をきちんととらえて、例えばアメリカの幸福か北欧の幸福か、そういう幸福の形をよりわかりやすいようにベンチマークすることが一番早いというか。会社をやっている者としては日本はこの国をベンチマークして、2050年に向けて組み立てていくのか。そういう組み立てが非常にわ

かりやすく早くていいかなという感じはするんです。

○阿部部会長 そのお手本となるような国というので合意できますでしょうか。

○新田委員 いろんな視点からでいいと思うんですけども、どこの国は何がいい、ここは何がいいという形で。

○野口委員 おっしゃるとおりで、よくブータンが幸福って比較されますけれども、やはり自分たちの国のことを幸福と言っている人たちは、信仰が非常に強いんです。そう考えると日本が同じようにブータンの信仰を日本は持てるかという、これはまた変わってきますが、なぜ彼らは幸福かということを1つヒントにしながら、それを日本の社会に持って来れるかどうかとなったときに、ざっと図の中に信仰が入っていないです。

意外とこれは役所が出すと信仰というのは言いづらいのかもしれませんが、幸福ということを非常に感じている人たちは大体信仰が非常に強い国が多いので、私は別に特殊な宗教に入っていませんが、日本では宗教的な話はタブーになってしまうので、本来それはタブーにすることではないのかもしれないと思うんです。いろんな国に行くと、宗教の話はすごく話が出ています。日本は宗教を聞くということ自体も何となくいきなり相手に聞くと、あなたは特殊な宗教に入っているのという色眼鏡をつけられるし、でも海外に行くと余りタブーになっていないので、意外と日本はタブーになっているので、ひよっとするとこの中にそういうものを入れていくということもありかなと思います。

○阿部部会長 信仰も入れてはいけないというルールがあるわけではないかと思えます。ただ、信仰を持つようにすると言っても、別に持つようになるわけではないです。

○野口委員 ただ、いろんな国があるではないですか。ちゃんと調べなければわからないですけども、幸福を非常に感じている人たちの1つのパターンの中に信仰はかなり入ってくると思うんです。

○阿部部会長 私も全くそれは同意しますけれども、かと言って今、日本人はそれほど信仰は強くないが、それを強くすることはできるのか。

○野口委員 ではなくて、信仰の意味です。別に信仰を持ちなさいという話ではなくて、信仰というのはそもそも何だろうとか、そこの意味を伝えていくことはありかもしれないですね。

○阿部部会長 古市委員、どうぞ。

○古市委員 まず具体的な調査から言うと、アメリカの調査なんですけれども、確かに宗教を持っている人は宗教を持っていない人よりも幸福度が高まります。一方で、ただ宗教だけを信じていても幸福度は高まらなくて、宗教という場が人を媒介する場になって、その中で友人関係なり仲間関係が築かれた人ほど幸福度が高まります。だから必ずしも宗教でもなくて、それは多分場の問題だということを経験している社会学者は言っているんです。

日本に関して言えば、日本は確かに具体的な宗教を持っている人は少ないのだけれども、聖なるものとか超越的なものを信じる人の割合は、決して低くないということを一応データから補足しておきます。

○阿部部会長　なので宗教というようなものを通してかどうかはわからないんですけども、古市委員のお考えでは何かを信じることだけではなくて、交流する場とか、そういうものがより豊富にあることが重要であるということですね。

○古市委員　そうですね。一方で信仰に絡めて言うと、例えばもう少し具体的なキャッチフレーズではないですけども、もう一つ目指すべき像というものがもう少しわかりやすい方がいいかなと思いました。

例えば田中角栄さんの日本改造計画でもいいんですが、日本中に毛細血管のように道路を張りめぐらせて、その中で1個の国をつくっていくという具体的なイメージがあったわけですね。同じように、もう少し具体的な2050年こうあるべきだというようなことをわかりやすいような形で、ちょっと冒険的に言ってしまった方が、結果的にそれはかないやすくなるのかなと思いました。そういうことを言わないで現実的な案だけを示すよりも、ぱっと示してしまった方がみんながそうだと思い込んで、予言の自己成就と言いますけれども、そういうことが起こりやすくなるのかなと1つ思いました。

○阿部部会長　どうぞ。

○永久事務局長　いい方向に議論が行っているのかなと思っているんですが、確かにこのマトリクスはかなり具体的になり過ぎてしまっているところがあって、部会長がフロンティア分科会に提出していただいた資料1というのが、何を指すのかというときに3つ分けられていて、幸福ってそもそも何だろうというときに主観的幸福、希望、Well-beingという3つの幸福の要素分けというか、そんな形にされていて、ではその3つの幸福を実現するために、どのような分野があるかというときに教育、家族、働き方、地域、食、国際というような形でかなり幅広い分野というか、割と抽象的な分野で分かれていたと思うんです。

ですから、そうした何を指すのかというものを多少決めた中で、その分野の中で何をしたいのかという、そういうことをもう少しアバウトなマトリクスで、マトリクスというよりもツリーの方がいいのかもしれませんが、そうしたことで発想して行って、最後に政策論のところに来たらより整理がしやすいのではないかと思います。そのプロセスの中で、1つのキャッチフレーズみたいなものが出てくるのではないかという気がします。

○阿部部会長　ありがとうございます。議論が先行し過ぎてしまったのかもしれませんが。ただ、実際には私たちは報告書完成まであと1回しか時間がないんです。ですので私たちの方も焦ってしまったというのもあるかと思います。具体的なイメージとか図というのでは。

○福島委員　全体の締切りはいつなんですか。それ自体がどうも私は疑問です。

○阿部部会長　締切りは4月中に報告書完成です。

○福島委員　それは余り幸福ではないですね。

○永久事務局長　それについて御説明します。確かに本当に短いですね。私がお引き受け

したときも本当に短くて、こんなのできるのかなと思ったんですけども、中間報告をとりまとめるのが5月の連休明けに発表となりますので、各部会の具体的な中身については4月中にお書きいただかないと、それに間に合わないという計算になります。

なぜ5月となっているかと言いますと、これは国家戦略会議の基本戦略を出すのがその後になりますので、それより前にこれができていないといけないことになっているわけです。それに整合性を保つようなことで5月中旬には出さなければいけない、連休明けには出さなければいけないということです。

ですから完成度で言ってしまうと、そこまででしょうがないという、ある意味思い切った決断をしなければいけないのかもしれないかもしれません。

○野口委員 それはもとのいつまでにやらなければいけないというのは、何でそんなに急いでいるのかなと思って。それは政権が変わるかもしれないということですか。

○永久事務局長 そうした政治的なことは一切考えていません。

○野口委員 でも、2050年の結構大きなプランではないですか。何でそれを半年ということで、もともと決まった経緯がよくわかりません。

○永久事務局長 私自体も細かいところの経緯までは知りませんが、中長期ビジョンが必要だという認識はあったんだと思います。この国家戦略会議の中で基本戦略というものを6月に出されるということで、それは中長期ビジョンにのっとったというか、それにのっとった形でないとおかしいはずなんです。ですからそれに間に合わせるためにこちらの方を先につくらなければいけない。

○野口委員 そうしたら、この委員会をもっと早く始めればよかったですね。

○永久事務局長 そう思います。私は率直にそうだと思います。

○野口委員 無理があるなと思って。

○永久事務局長 私も無理があるなと思いますけれども、ただ、その無理の中でやれることをやりたいと思っています。

○福嶋委員 まさに時間がすごい短い中なので、そういう意味ではまず何を指すのかという目標をまず決めて、そこからバックキャストで必要な作業を割り出していくという風にやった方が、時間的にも短くできるのではないかと思います。

○阿部部会長 おっしゃることはわかります。ですので、例えば今この部会で何を指すか決めなければいけないんです。そうでないと間に合わないんです。

幸福の定義は何かということを考え出したら、それだけで1年、2年、3年ぐらいかかる大プロジェクトなんです。なので、それはみんなが満足するものではないんだと思うんです。ですから、ある程度割り切ってやるしかないというところなんです。

私がこの議論の部会が始まったときに最初に「何を指すか」と訊いたときに、主観的な幸福感か希望か実質的な生活水準かといったときに、何人かの方は主観的な幸福感というのは指標にならないとおっしゃったと思います。それはニーズが潜在化されるですとか、現状がそこそこだったらそれで満足して幸福だと答えることが多くなるということなので、

ですので私はその幸福度調査の結果はあえて使いませんでした。それはこの調査の最後のところの幸福の定義は主観的幸福感だからです。

かと言って、希望が使えるかと言うと、希望を規定するものというのは希望学の方で幾つかありますけれども、そこでは健康などがあります。それで、では希望がある社会なのか。または実質的な Well-being なのか。私自身としては実質的な Well-being ではないかと思っているのですが、そこの2つで考えていきたいと思うんですけれども、この幸福部会としては何を指すんですかというところですね。勿論また主観的幸福感に戻ってもいいかと思います。

○野口委員 この幸福部会は4つか5つに分かれているんですね。そのうちの1つがフロンティア分科会ですね。

○阿部部会長 いえ、幸福部会はこれだけで、そのほかは叡智の部会、平和の部会、繁栄の部会です。

○野口委員 それは別に幸福を求めるものと全く関係ない話ですか。

○阿部部会長 繁栄ですと経済的発展ですとか、叡智だとサイエンス、平和はピースです。

○野口委員 となると、今ここにあるこのたたき台は全部入っているではないですか。そうすると、これは部会によって役割分担というか、各部会の専門のところに任せるとかではなくて、この部会で全部やるんですか。

○阿部部会長 例えば叡智の部会は、日本の中での先駆的な科学者を育てるにはどうすべきかという話をしているんです。それとか日本の文化をどうやって世界に発信していくかということで、そういうところは全く入っていないですし、平和の部会は軍事の問題ですとか、そういうものが入っているんです。ですので実際に人々の暮らしに関わる場所ですとか、家族の話というのは、この部会しかないんです。なので、この部会は非常に守備範囲が広いのですが、そこは致し方がないということで、幸福という1つの大きなお題をいただいてしまいました。

○新田委員 これはオフレコなことかわからないんですけれども、経済の世界だと日本という概念が実はなくて、みんなグローバルですね。ある面、保護されていない限りは。なので人類にとっての幸福とはとか、そういうことの方がより現実的だなと。この議題になると思うんです。すると本当に日本のことだけ議論していて日本の幸福でいいのかな？とはずっと思っていたんです。あとは2050年とか二千数十年、継続的に人類が繁栄というか、生き残っていける姿をどう描くのかという議題の方が、より現実的のような気がします。

○阿部部会長 そうすると国際政治ですとか、国際情勢なども全部入ってくるということですね。

○新田委員 そういうこともあるんですけれども、やんちゃな議論ということ言えば、あるべき姿というところが必要なのかなと。

○永久事務局長 今までこういう部会が名前をつけられるときにおいて、例えば経済の部会とか行政の部会とか、あるいは社会保障の部会とか、そういう名前がつけられていたと

思うんです。それは手段で分けている部会だと思うんです。

部会の名前がこういうふうになっているのは、目的に応じて部会をつくろう。繁栄したいですね。みんな幸せになりたいですね。平和になりたいですね。そうした目的別に部会をつくっています。

なぜそういうふうにしたかと言うと、その目的に従って考える分野に関して制約を持たせないで、自由に考えていただきたいということがあったんです。ですから各部会で重複する領域が出てくると思います。その重複する領域については横で調整したいと思っていますし、どこかの部会に任せてしまうこともあるかと思うんです。ですから、そのところで議論しなければいけない手段の部分の分野については、自由に御議論していただいているのだろうと私自身は思っておりまして、それはほかの部会でも同じように思っていると思います。ただ、後で調整しなければいけないのは事実ですけれども。

○新田委員 幸福のこのテーマというのは、人間にとって一番最上位に持ってこられるべきテーマなので、非常にいい部会だな、素晴らしい部会だなと思っていて、そういうベースがあつての話ですので、誤解のないようにお願いしたい。

○阿部部会長 新田委員がおっしゃった、だれの幸福かという話ですけれども、それについてはフロンティア分科会でも投げてみたんですが、そこの中で出てきたのは日本に住んでいらっしゃる外国人とか移民の方も含めたところまでは話は出ているんですが、世界人類のという形ではその時点では出ていなかったです。やはり国家戦略ですので国を超えたものところは、平和の部会は日本が国際社会の一員としてこのような役割をやるということは、ODA ですか、そういう話は出ているかと思えますけれども、それ以外のところは実際には出ていないというのが現実です。

○福島委員 日本人の幸福を考えても、そもそも日本だけでは存在し得ないわけなので、そういう現実があるので、日本以外の国と地球レベルのエネルギー資源、気候変動などを考えない幸福はあり得ないと思います。

それと、他の部会との関係ですが、私自身は提出したコメントにはこの幸福の部会が唯一自己目的化できる、完結する部会だと答えました。つまり、ほかのところ、平和はかなり目的化できるものではありませんが、叡智や繁栄はすべて手段で、幸福の実現のための手段ではあるけれども、幸福というものは唯一自己目的化、完結するものだろうと、コメントを求めるといのがどういう趣旨かわかりませんが、そういうふうにご答えたんです。

この報告書をどうするかという出口は、最終的には私たちを超えたところで話し合われるでしょうし、最終的な政策の落とし込みのときは勿論、実現可能かということも財源を含めて議論がされるので、そこまでは我々が先回りして考える必要はないと思うんです。

何を必要と考えるか。私たち限られた有限の委員の中での主観と主観をぶつけ合って、その中で発生したある種、化学反応ででき上がった私たちの部会の1つの答えを、こういう見方もありますねという参考意見として出す。それは財源が幾らあつて何ができるかというところから考えたのではなく、何をすべきかというニーズを出発点にして、ニーズを

幸福に生きるという観点から考えて、そうして最終的にどういう政策が必要かという話に持っていくという、小さいところから大きい方に持っていくという、これまでとは逆の発想で議論しているということなんだろうと思いますので、そこから最終的にまた実現可能かということを検証するのはとても私たちには今、できなので、私たち委員は好きなことを言って、あとは部会長と部会長代理でえいやでつくっていただければ、それでいいだろうと思います。

○阿部部会長 ありがとうございます。

私としてもある程度部会の報告書では好きなことを言い放題して、それを政策に落とし込むかわいそうな方たちが上の方にいらっしゃると思っておりますので、今の時点で私たちは自分たちの動ける範囲を縛る必要はないんです。おっしゃるとおりで、まず聞きたいのは、2050年に絶対にこれがあるべきだと思うのは何なのかということなんです。

なので、もとの話に戻りますけれども、それで幸福の定義というのは喧々諤々することはありますが、実際に2050年あるべき姿の欄を見ていただきたいんです。ここに書いてあることはかなりざくっとした、こうなったらいいねみたいのところだと思います。子ども期の貧困による健康、学歴、社会、経済格差の解消。私はこれは絶対あるべきだと思っておりますので、これを書かせていただきました。これは別にあるべき姿に入っていない方がいいよというのがあれば、それは言っていただければいいですし、例えば下の出生率の回復2.1までというような話も、私は絶対これは最終的には必要だと思ったので書いたものです。これは本気の少子化対策が必要だという委員からの発言があったので入っています。

先ほどの福島委員の質問にもありましたけれども、出生率が2.1に回復しない限り人口は減少し続けます。今の予測では2.1に回復しないです。ですので、ずっと人口は減少し続けます。今の予測では、ですので、ある時点で2.1まで回復しなければいけないんです。そうでないと日本は消滅してしまいますのでこれは絶対条件だと私は思っています。この中ではそういうものをいろいろ入れております。ですので、これを見て議論していただければと思います。こういうものは別に要らないのではないかとこのものもあると思いますし、これが足りないというものもあるかもしれません。ですので、そこでいかがでしょうか。

○新田委員 先ほどから申し上げているんですが、日本だけというのがなかなか見えなかったものですから、実はうちの社員の1個の家族をとらえて、その人たちの幸福がやはりみんなの幸福につながるんだということで、私としてはそのように落としたんです。その家族が収入も多分減るだろう。だけれども、ワーク・ライフ・バランスがとれている。幸福感が増した。もっと言えば病院とか医療とか、いろんな生活の困っている人たちのセーフティーネットもあればということが非常に大事だと思うんですけども、あと2.1の部分で言うと人口が地球上は増えるわけですから、わざわざ日本人同士が子どもを増やさなくても、移民政策をとればいいのではないかとこの議論も当然あるわけですので、日本の人口は何人が適正なんだというところ、地球上はどれぐらいが適正なんだという方がむしろ

ろ現実的かなと常に思っているんです。

○阿部部会長 人口に関してはまさにそうです。別に日本人なんていなくても構わないよというのがあると思います。ですので、まさにこれは私たちの価値観のぶつかり合いのところだと思いますけれども、ほかの委員ももし御議論があれば言ってください。

○野口委員 人口で言うと、高齢者が増えて若い人が少ないというバランスは問題だと思うんですけれども、先を考えたときに、日本とイギリスとイタリアは国土の面積は大体一緒だと思うんです。向こうは6,000~7,000万ですね。そう考えると1億2,000万を維持するのが本当に快適なのかどうか、何人なら快適かどうかというところはすごく大事だなと思うんです。

○阿部部会長 2050年は8,000万になっている予想です。

○野口委員 8,000万人のバランスがもし整っていれば、意外とそれは快適なのかもしれないですね。

○阿部部会長 8,000万で維持することを目標とするか、それよりどんどん下がっていてもOKなのかというところですね。8,000万というと昭和30年代ぐらいの人口です。

○新田委員 やはり常に環境は汚染し続けていますね。今、人口が爆発している状況というのは皆さんわかっているわけですから。

○阿部部会長 ほかの部分でも。國光委員、どうぞ。

○國光委員 人口に関しては私も個人的にはお二人のおっしゃるとおり、日本国だけを国家として考えれば、確かに生産年齢人口が増加して、経済力を保ち、安定した高齢者を支える姿というのは必要ですので、人口を保つというのはわかるんですが、一方でアフリカなど大変な人口爆発が起こっていて、その延長での食料危機を想定すると、恐らく2050年も危険な状況になっていることがありえます。そういう面では、しゃかりきになって日本が人口を、日本国民を維持しなければいけないというのは、どうなのかなと思うところがあります。

では、代わりの策というのは移民が考えられますが、移民がすぐこの国に入れることを容認するかというと、100年後ぐらいはいいと思うんですけれども、2050年はまだ厳しいのかと思います。

○阿部部会長 50年後に移民を入れなければいけないと思うのであれば、そのように政策をとっていかなければいけないので、そこはどう思われますか。

○國光委員 方向性としては、少子化対策はもちろんですが、人口政策や多文化共生の面で、私は少しずつ入れていくことも検討に値すると思っています。

○阿部部会長 2050年の姿として、もう少し移民の方々が入りやすいようになっているべきであるというのを、その先の姿としている。

○國光委員 平和部会の議論につながるかもしれないです。移民が来ると、アメリカの都市のように治安が悪化するとおっしゃる人もいらっしゃるわけですが、今すぐは難しくとも長期的には、アフリカ人のお子さんを養子にいただくなども含め、日本だけでな

く世界全体の社会・安全保障を許容できる社会が未来にあってほしいと思っています。

○阿部部会長 少子化対策についてはどう思われますか。どなたかの委員の発表の中で、本気で少子化対策をする必要があるというのが出てきたんです。

○新田委員 結婚して子供をいっぱいつくりたいかどうかというデータか何かはないんですか。

○古市委員 少子化に関しては、別に日本全体が減少していくことはいいとも悪いとも言えないんですが、少なくとも言えるのは1.4というのが余りにもハードランディング過ぎるということだと思います。

基本的に今、北欧であっても大体出生率が1.8~1.9ぐらいで、基本的に人口減少社会なんです。ただ、北欧に関して言えば何十年かかけてもゆっくりと人口減少している。それに比べて日本は1.4とか、これからもっと下がるでしょうけれども、その中で余りにもハードランディング過ぎることが問題だと思うんです。

実際にその過渡期が終わってしまって、ある程度人口がおさまるといふ段階が来たらいいんですが、そこまではまだ行っていない中で、少子化対策は少なくとも50年後とか100年後に関してはわからないですけども、50年後ぐらいまでは必要だとは思っています。

もう一つ、少子化対策に絡めて女性をいかに活用するかということをもう少し書いてもいいかと思うんです。例えば移民の話でもあります女性の労働力率の低さというものは、日本の残念なところの1個だと思っています。労働力曲線のM字型カーブがもしも台形になったら、GDPが15%上がるという試算もあります。

だから移民という前に、これは少子化対策にも関わってくるんですけども、子どもを増やすためだけに待機児童などの問題を考えるのではなくて、同時に女性をいかに活用するか。結局それは女性からの税収も増えるわけですし、それこそ公助ではなくて共助の段階、つまり家庭というものを安定させることによって福祉の可能性が少なくなるという点において、そこは盛り込んでも、当たり前過ぎてあえて盛り込む必要もないのかもしれないですけども、そこはもう少しその視点があってもいいかなということは1個思いました。

○阿部部会長 女性の労働力関係のところは、労働市場改革に結構書き込まれているところかと思えます。

○福島委員 多分、因果関係は逆で、女性の進出を助けることで結果的に人口が回復するのではないですか。スウェーデンはそうですね。スウェーデンが何十年もかけてやってきた道のりを、我々日本は20~30年かで通過しようとしているから、未曾有のとか世界初のというふうに言われるわけで、例えばスウェーデン的な姿を1つのモデルのイメージにするのであれば、まず女性の社会進出を徹底的に進めていくということ、それが結果的には労働力の確保と、子どもたちが育ちやすい社会につながっていくだろうと思いますので、それが先だろうと思います。

○野口委員 外国人労働者の移民をもっと入れるべきだという話で、現在も外国人労働者

に相当頼っている現実があります。しかも相当頼っているにもかかわらず、不法労働という形で入っていて、地方の工場というのは不法労働者の外国人労働者がいなかったら回らない。日本の経済は彼らに頼っていながら、彼らをちゃんとしたフェアな形で入れていないわけです。ですから、たまに彼らは摘発される。そこが少しアンフェアだなと思うんです。頼っていながら、ちゃんとした形で入れていない。

少子化問題も外国人労働者が入ることによって、海外なんかは一般的です。例えばフィリピンの方とか中国の方がお手伝いさんとして家にいて、子どもの面倒を見てくれて、両親が仕事に行くというのはかなり一般的です。日本は自分の家にお手伝いさんを呼ぶというのはかなりレアというか、よっぽど金持ちでないとできない。海外では普通にやっていますね。ですから、外国人労働者を入れることによって、逆に安心して子どもを預けることができ、結果、子どもが増えるというようにつながっていく気がします。

ただ、今の外国人労働者をできるだけ入れないというやり方は、既に頼っているにもかかわらず、フェアな形で入れないというのはアンフェアだなと感じます。

○阿部部会長 外国人労働者に対する待遇改善ですとか社会保障。

○野口委員 ちゃんとした形で入れるということです。

○阿部部会長 いろいろな問題等が起こっています。社会保険がカバーしていないとかあります。

○新田委員 先ほど古市さんにお伺いしたんですが、最近、若い子の話を聞くと、我々の世代だと結婚しないと世間体が悪いとかよく言われたり、子どもをつくらないと周りから何か言われるとか、そういうことがどんどん薄れてきていて、できるんだっとならなくていいとか、もしかしたら今のこういう時代で子どもをつくって生活することが大変だという人がかなり増えていて、現実的に結婚して子どもをつくれな人たちのの方がむしろ多くなっていることの方が問題なんだと思うんです。

なので、そういう 2.1 というのは当然そうなんですけれども、現実問題、国として子どもをどう育てられるんだ、人をどう育てられるんだということを議論しないと、現実がそういうふうに進んでいるのかなと。

若い人たちは結婚して子どもをいっぱいつくると考えていないから、そうなってしまうと思うんです。

○古市委員 1つ統計的に言えるのは、子どもを産みたい数というのは実は昔から余り変わってなくて、大体、今2人ぐらいの子どもが欲しいと思っている人の数は余り変わっていないんです。ただ、そこは経済的な状況とかいろんな状況があって子どもを産めなくなっているというのはそのとおりなんですけれども、だからやはり今の福祉制度というのが、働く正社員のお父さんと専業主婦と家族向けになっているので、そこはフリーター2人であっても子どもを育てられる社会みたいな形に、組み替えていく必要があると思います。

○阿部部会長 ちょっと議論を整理したいと思うんですけれども、今の若い人の話もそう

ですし、外国人の方もそうですが、結局のところ政策的な分野になってくると労働政策の話になってくるということでもよろしいんですか。それとも、少子化対策のような子ども手当だとかそういうものになってくる。両方必要とか、保育所ですとか、そういうものですか。

○新田委員 財政の問題から言うと今はこういう財政ですので、人が増えて経済が成長しないと行き詰る。今でも行き詰まりそうなわけですけれども、そこを全く無視していけば、先ほどの議論のとおり日本は6,000万とか8,000万が、環境も含めて非常にいい状態なのかもしれないという方が、むしろ生き物というふうにとらえれば適切なのかもしれないですね。だからいろんな因果関係があって、人がこれだけいないともたないみたいな言い方をするんですが、実際に生きていく環境がもたなくなってしまう可能性の方が高いので、どちらが先なんだという話ですね。

○古市委員 2100年のあるべき姿を考えたらそうだと思うんですけれども、2050年がちょうど過渡期だと思うんです。2050～2060年にかけて高齢者と現役世代のバランスが一番悪くなると言われていています。2050年のことを考えると、急に減らす方が現実的ではないと思います。

○阿部部会長 ということで少子化対策も必要だということでもよろしいでしょうか。國光委員、どうぞ。

○國光委員 まとめ方なんですけれども、幾つか今まで論点が出ましたが、主観的な幸福感、Well-being、希望だったら、Well-beingに皆さん関心が強い印象があります。あと、報告書を出すときのイメージで2050年のあるべき1日と、石戸さんにデジタル化してもらおうというのはすごくいいと思います。いかにも斬新でみんな見ると思います。

ただ、この政策の方向性は何かテーマを絞った方がいいのかなと。どうしても限界ではないですか。

○古市委員 テーマを絞るというよりは、表現の仕方かなと思っていて、まさに新田さんが家族とかの話で考えたとおっしゃっていましたがけれども、具体的な像みたいなものを出していけばいいと思うんです。例えば私が先ほど言ったようなフリーター2人でも生きていける社会ですとか、サラリーマンが明日からでも屋台を始められる社会とか、やはり具体的な家族なり人間のモデルを出して、そのためにはこれが必要なんですよという形で2段階にしたら、この表も生きてくるのかなというのは今、話を聞いていて思いました。

○阿部部会長 最初によりリアルな像があって、それは発表を次回の4月の会議のときに古市さんにやってもらおうと思うんですけれども、これを絞るというのは見ていただければ、中は今まで出てきた話のことしか書いていないんです。少子化対策の話があって、教育の話があって、労働市場の話があって、地域の話があって、健康の話があって、政治の話があるというところなので、皆さんのヒアリングの中で出てきた話ばかりなんです。

なので、これを先ほど私が最初に優劣つける必要はあるだろうというのはあるかと思えます。これだけというのはあるのかと思えます。ただ、今の段階で、今はたたき台です

ので無理に絞る必要はないと思いますし、例えばここから教育を取れるかと言うと取れないだろう。社会保障は取れますか、取れないでしょうみたいな感じはするんです。どの分野であっても。

○永久事務局長 これは整理の仕方の問題なんだと私は理解しているんです。上村さんがせっかくこれをつくってきていただいて、この3つのラインがあるのがいいのかどうかは別として、2050年の幸福の姿というのは3つに分類して、未来の幸福と地域の幸福と世帯の幸福と分けてしまって、その中でいろんな政策がありますけれども、それがどこにはまるんだろうという形でやっていると、ツリーになっていくんです。世帯の幸福を実現するものとして例えば貧困の解消かな、格差の是正かな、労働市場なのかなとか、地域の幸福って地域の活性化と社会的包摂化、未来の幸福というのは教育改革か社会保障か少子化対策なのか。そうすると完璧にきれいになるとは思わないけれども、何をやるために何があるんだということが、1つちょっと整理されてくるのではないかと思います。

先ほど私が部会長が言っていた Well-being とか主観的幸福とか Hope も別の切り口で同じようにできると思うんですが、真ん中にあった方がいいというのはまさにそのとおりで、こうした整理の仕方をやればもう少しリストではなくて、まとまったオーガニックな形になるのではないかと思います。

○阿部部会長 整理の仕方について考えさせていただきたいと思います。ただ、全体的なアイデアとしてはまず古市先生に描いてもらおう。これで上村さんの絵で言えばハッピーマークの顔がどういう顔なのか、どういう時代を描いているのかということを書いてもらおう。それを実現するために、それをどのように整理するか。幾つかに結局のところカテゴリー化するだけに過ぎないんですけれども、一番下で政策が出てくるわけなんです。

なので、表現の仕方は多少工夫したいと思いますが、実際に何が達成されているべきなのかというところと、それに必要な政策という議論をしなければいけない。済みません、今日は時間になってしまったので、やはりこういう話は時間をすごく長くとるなと思って、あと1回で本当に何とかなるのかとすごい心配ですけれども、持って帰っていただいて考えていただきたいと思います。

それで、自分はこれだけは外せないと思うものについては、後に教えていただければと思います。例えばいらっしゃらないので例として挙げてはいけないかもしれないですけれども、石戸委員はデジタル教科書と教育のIT化が絶対不可欠だと思っていらっしゃるわけです。そういうところは入ってくるんだと思います。ですから、皆さんの方にしても、これはというものがあれば言ういただければと思います。

○福嶋委員 整理の仕方で、まさにおっしゃっていただいた、こういう分類に従ってはめ込んでいくという整理はすごく大事ななと思っていますが、さらに、カテゴリー化された政策が古市さんに描いて頂くという「2050年のある1日」を実現するためにどう作用していくかという、個別の人々のプロファイルに合せた政策の連関性も併せて示せるといいのではないのでしょうか。結局政策の受け手となる側の国民が報告書を読んだ場合に、こうい

う政策があったらこういう生活が送れるのでいいな、というのがすごくわかりやすくなってくると思います。

○阿部部会長 私はむしろ後者の方にむしろ期待していて、分けてもどちらにでも入るだろうというのが結構いっぱいあって。

○福嶋委員 結局例えば自分自身の家庭にとって何かいいことあるのと国民から問われたときに、答えられないかもしれない。だから古市さんが具体化してくださる絵の中に出てくる人たちが「いいな」と思うようなものをリスト化していく、ということだと思います。

○阿部部会長 この人がこれをやっている。では、これをやるためには何が必要だといって、そこからリンクが入るような形にしたいですね。

○古市委員 後に教えていただけたら、具体的な個人がこうなっているみたいな図を、これは外せないという感じで教えていただけたら嬉しいです。

○福島委員 1つだけ確認させてください。

この上村先生が3つに分けているもののうち、未来の幸福ということですか。これはよく考えたらいつの時点でのことをおっしゃっているのか。今から見ている未来なのか。そうすると世帯の幸福や地域の幸福は未来ではなくて、現在なのかということですね。世帯の幸福や地域の幸福も未来の幸福のことを言っているのではないか。もしそうであれば未来の幸福を別軸で立てる意味があるのかということところが理解できないのですが。

○阿部部会長 そこは私も理解できません。正直なところ。地域の幸福が自治体としての地域の幸福なのか、地域に住んでいることによる世帯、個人の幸福なのかということも、わからないなというのがあります。どちらかと言うとみんな個人や世帯の幸福を言うために、前提条件としてそろっている条件みたいなものなのかなという気が、地域と世帯は思いますけれども。

○新田委員 わかるようにやった方がいいと思います。

○國光委員 まとめ方なのですが、私はこれがいいのではないかと思うのは、申し訳ないですけども、幸福度に関する研究会の報告書で、主観的幸福感は議論があるので別として、その柱が社会経済状況と健康と関係性というのは、よくきれいにまとまっていると思うんです。それに、それなりの幸福研究に関わる方が集まって議論されており、私も議事録を全部読んだんですが、なるほどなと思ったところです。どう詰めていっても多分こういうことだと思うんです。主観的幸福感は適当でないとしたら、Well-beingに置き換えればよいのではないかと思っています。

○阿部部会長 下のこの部分と、この部分はかなりオーバーラップするところもあると思うんです。それで当てはめていくことは可能かとは思いますが。

○新田委員 古市さんの素晴らしい絵を期待しています。

○阿部部会長 結局ほとんどの人が見るのはそれしかないと思うので、そこをすごく期待しておりますので、よろしくをお願いします。

ということで議論が白熱化してしまいましたが、次回もこのような調子で頑張りたいと

思います。本日は長い間どうもありがとうございました。